

# オラービー運動（一八七九—一八八二）の性格について

板垣雄三

## A 対象と方法

### a 対象のアウトライン

### b 連關の把握

#### I エジプト近代史の段階區分

#### II オラービー運動の國際的連關

### c 課題の整理

### A への註

## B 運動の組織と形態

### a 國民黨の成立と組織原理

### b 國民黨の運動原理

### c 大衆の不滿の結集

### d 軍隊組織の意義

### B への註

## C 運動の思想的側面

### a エジプトの獨立

### b 立憲主義

### c イスラム改革

### d 人民的立場

### C への註

オラービー運動（一八七九—一八八二）の性格について

## A 対象と方法

### a 対象のアウトライン

いわゆるオラービー運動(エジプトではオラービー革命 *Al-Thawrah al-'Urābiyah*、ヨーロッパではアラビー反亂 *Arabi Rebellion*)は、一八七九～一八八二年のエジプトにおいて政治的・社會的改革を要求する國民黨 *al-Hizb al-Watani* を中心とした民族的な運動であつた。それは、財政破綻に對して導入された英佛二元管理 *the Dual Control* に對立し、ヘディーヴ *Khedive, khidiw* の專制政治に反對し、「エジプト人のためのエジプト」 *Misr li-l-Misriyin* を主張したことによつて、この段階でのエジプトの自由と獨立とにかかわる問題を提出した。その指導的中核はアフマド・オラービー *Ahmad 'Urabi* 大佐に代表されるエジプト人將校とされており、事態はたしかに軍隊の組織的反亂を主要な軸として展開したが、しかしこの運動はオラマー(學者) *'ulama* やシャイフ層 *mashāyikh* の支持のもとに廣く都市および農村の大衆的な激動を土臺としており、エジプト社會の動搖を全面的に反映していた。オスマン帝國の宗主權、ヨーロッパの財政上の監督に端を發する各種の干涉、および國內政治におけるヘディーヴを頂點とするトルコ人・チエルケス人らの權力という、エジプトの支配體制の複雑な構成諸要素は、この事件を通じてそれぞれ獨自に對應し、ある場合には運動を利用しようとしたが、結果として、オラービー運動はこれらのあらゆる要素と對立することとなつた。國際的干涉はこの運動の環境および動因をなしており、運動の展開を通じて、その端初から終局までを規定する條件であつた。國民黨の權力はその基盤を固めるゆとりをもつことなく、

ただちにイギリスの軍事干渉との対決を迫られ、敗北を喫したのである。二元管理およびオラービー運動の展開過程は、それぞれつぎのごとき諸段階として説明されうるのである。

## (一) 二元管理の展開過程

### (イ) 第一段階

一八七六・三 イギリス ケーヴ Cave・リポート

### 四 大藏證券支拂停止

五 佛・オーストリア・イタリアの債權者、國債整理委員會を設立。五・七法令

一〇 ンシェン卿 Lord Goschen・ジュベール M. Joubert 委員會の活動。ヘディエヴがわ證據湮滅のためイスマール・サディーク (ムファアティシュ) Isma'il Sadig Mufatish 殺害される。

一一 一一・一八法令 (イギリス側の五・七法令による債權整理方式に對する反對により改訂されたもの)

財政監督官の任命 (歳入擔當—イギリス人、歳出擔當—フランス人)

鐵道局、計理局、税關等へのヨーロッパ人官吏の増加にもかかわらず、債務償却を保障するための國家收入の實現過程に關してはほとんどノー・タッチ、エジプトの傳統的な行政・收奪機構の上に依據している。凶作、ペスト流行のもとで、シャーヒーン・パシャ Shāhin Pāshā、オマル・ルトフィー 'Umar Luṭfī らの暴力的増徴が強行される。しかしその効果に對する疑問から内政全般に及ぶ大幅な審査と改革とへの要求がつよまる。

オラービー運動 (一八七九—一八八二) の性格について

(四) 第二段階

一八七八・一 ヘディーヴ・イスマリーール Khidiv Ismā'il 歳入に關してのみ調査委員會の設立と活動を認める。

四 大幅に讓歩し、廣大な調査權をもつ調査委員會の設立を認める。

八 調査委員會中間リポート（ヘディーヴの財産調査を含む）。

ヘディーヴ、「責任内閣」の要求に屈しヌーバール内閣を承認。

ヌーバール内閣（ヨーロッパ内閣）首相ヌーバール・パシヤ Nubār Bāshā（アルメニア人）、大藏大臣 R・ウィルソン Rivers Wilson（イギリス人）、公共事業相ド・ブリニエール De Blignière（フランス人）のもとで改革案が用意される。（破産宣言―清算法、ムカーバラ廢止、オシュル増徴（事實上の税率ひき上げ）、將校の大幅解雇を含む官吏機構の縮小） 二・一八事件により、ヨーロッパ内閣は罷免され、イスマリーールの退位まで、これらの改革はペンディングとなつた。

(イ) 第三段階

一八七九・八 ヘディーヴ・タウフィーク財政監督官制の復活を承認

一八八〇・一 ムカーバラ Muqābalah 法廢止、オシュル 'ushr 増徴決定

四 清算委員會成立

一八八〇年豫算では、歳入の六六％を負債償却にあてて。↓將校・官吏の解職、給料停止。

リヤード Riyā'ī Bāshā 内閣のもとで、内政と管理勢力がわの要求との一致が實現されて行く。これへの抵抗が、

二・一事件、九・九事件と擴大發展して行き、九・九事件によるリヤード内閣辭職、豫算審議權を主張するマフムド・サーミー Mahmūd Samī 内閣の成立は、二元管理のがわからず、深刻な危機としてうけとられた。

## (二) 運動の展開過程

### (イ) 第一期(一八七九・二～一八八一・一)

#### 一八七九・二・一八 二・一八事件

サリーム・ベイ Salīm Bik のひきいる不平將校・軍學校生徒、R・ウィルスン、ヌーバールを監禁。ヘディヴ、ヨーロッパ内閣の罷免をおこなう。↓タウフィーク Tawfīq リヤード内閣。この事件の背景として一八七九年はじめの名士會議のはなはだ自主的な傾向が注目される。

#### 三・四 政治的な運動のたかまり(① 名士會議の權利擁護、② 破産宣言反對)。

二・一八事件に關係した嫌疑、オラービー、アッルービー、Ali al-Rūbi, アンナーディー al-Nadī にかける。↓農民出身將校の積極分子の結集がすすめられる。

國民黨の結成、祖國憲章。

この間、英・佛はヘディヴ・イスマールルのヨーロッパ内閣罷免およびタウフィーク・リヤード内閣成立におけるリヤード・パシャの内相からの轉職に反對する干渉。これに對してヘディヴは一方で二・一八事件および祖國憲章を中心とする名士會議勢力の利用をはかる。

#### 四 シャリーフ Muhammad Sharif Bāshā 内閣任命、憲法(ラーイハ)の準備。

#### 六 ヘディヴ・イスマールルの退位〔英佛およびトルコの決定による〕↓タウフィーク、ヘディヴ

オラービー運動(一八七九—一八八二)の性格について

ヴとなる。タウフイークの憲法拒否。

七 シャリーフの辭任、名士會議の解散→リヤード内閣。

リヤード内閣のもとで

① 二元管理の再組織と確立〔一八八〇年はじめの破産宣言、清算法、ムカーバラ法廢止へと急速に導く過程〕

② 批判的分子への壓迫〔アフガーニー Jamāl al-Dīn al-Afghānī の追放、アブドゥフ Muḥammad Abduh は故郷へ。農村シャイフのムカーバラ法廢止反對請願への壓迫。軍隊内部での壓迫強化。〕

③ 農民出身將校を中心とする國民黨、アレクサンドリアにおける青年エジプト Misr al-fatāḥ 運動などの組織の強化

一八八〇・一〜三 前記リヤード内閣の記事①の實施

五 軍隊におけるトルコ人、チエルケス人將校の優遇を不當とする農民出身將校の第一回請願

一八八一・一・一五 オラービー、アブド・アルアール ‘Abd al-‘Alī Ḥilmi’ アリー・アフミー ‘Alī Fahmī’

リヤード首相に對して、オスマーン・リフキ ‘Uthmān Rifki’ 軍事大臣の罷免を要求する請願。

一八八〇年の間、アッルービーの活動を軸として、農民出身將校グループと閣僚マフムード・サーミーとの連絡つよめられる。一八八〇年末、官報 *Al-Waqā’i al-Misriyah* の編集にあたり、檢閲を擔當したムハンマド・アブドゥフ、大幅に檢閲をゆるめる。フランス領事 *De Ring* 農民出身將校と連絡（一八八一・二まで）。イギリ

スはいスマーイル退位への干渉以後、グラッドストーン Gladstone 政府成立にともない、消極化。

(ロ) 第二期（一八八一・二〜一八八一・九）

二・一 二・一事件（カスル・アンニル事件）

三將校の逮捕審問、マフムード・オバイド Mahmūd 'Uba'id 大尉のひきいるファフミー 'Alī Fahmī の部隊による解放。ヘディーブ・タウフィーク、三將校の要求をいれオスマーン・リフキー 罷免→マフムード・サーミー・アルバールデー Mahmūd Samī al-Bārūdī の任命。

オラービーのアル・ワーヒドとしての人氣。マルサーフィーの Risalah al-Kalim al-Thamān 内容流布。農民出身將校グループとマフムード・サーミー、スルターン・パシヤ Sultan Basha' スライマーン・アバーザ 'Slaimān Abāza' アッ・シュライイー Hasan al-Shurā'i' らとの結合いよいよ強化。他方、アリー・ファフミーをチャネルとして、農民出身將校グループへのヘディーヴ・タウフィークの働きかけ（リヤード＝二元管理体制への不満による）。

七 バールデー 辭職を強要される。→ダウード・パシヤ Da'ūd Basha' 軍事大臣となる。アル・アールの審問、農民出身將校グループの積極分子の轉勤をはかる。

(ハ) 第三期（一八八一・九〜一八八二・二）

九・九 九・九事件

オラービーの指揮下でカイロの軍隊、アープデーイン王宮へ進撃。ヘディーヴに對する三要求提出（①リヤード内閣の罷免②憲法③軍隊の増員）→シャリーフ・パシヤ内閣成立。一六〇〇人の立憲政

オラービー運動（一八七九—一八八二）の性格について

治請願。

一〇・四 新名士會議召集の勅令

一〇・六 トルコ使節アリー・ニザーミー・パシヤ 'Ali Nizami' アリー・フアード 'Ali Fu'ad アレクサンドリア到着

同 英・佛、艦隊派遣

一一・一五 佛ガンベッタ Gambetta 政府成立

一二・一五 ガンベッタ、英佛共同覺書（ヘディーズの權利擁護の内容）提案

一二・二六 名士會議の開會

一八八二・一・八 英・佛共同覺書 Joint Note, Note Identique

これ自體、英・佛間の矛盾の表現（佛―英の協力をとりつけつつ干渉促進、英―佛の積極干渉を制約する）。本國政府の態度では、佛は斷然強硬、英は全く優柔不斷、それにも拘らず現地での活動においては、ヘディーズとの結合・積極干渉の推進者はイギリス。佛、動きとれず。二・一 ガンベッタ内閣辭職→ド・フレシネ De Freycinet 内閣成立。

これと平行して、名士會議は豫算審議權をめぐり、シャリーフ内閣と對立。

一・一〇 オラービー軍事次官となる。

二・二二 シャリーフ・パシヤ辭職→マフムード・サーミー・アルパールデー内閣成立、オラービー軍事大臣となる。



(二) 第四期(一八八二・二—一八八二・七)

一八八二・二・七 憲法成立

三・一二 ド・ブリニエール(財政監督官)、ド・フレシネ政府により解任。

四・一二 チェルケス人將校陰謀(オラービーら暗殺の)事件摘發、裁判。

五・九 ヘディーヴ、チェルケス人將校の減刑をおこなう。

五・一二 ド・フレシネ對英六項目提案(イニシヤティヴの回復をめざす)。

五・二五 英、最後通牒。バルルーディー内閣の辭職を要求。

五・二七 バルルーディー内閣辭職。

五・二八 この時期のカイロ、アレクサンドリアを中心とする名士集會、大衆煽動を背景として、バルルーディー内閣の復歸。

五・三〇 佛、エジプト問題にかんする列國會議開催の提案(共同覚書のラインを放棄)。

六・七 トルコ使節ダルウィーシュ・パシャ Darwish Pasha'アフマド・アッサフト Al-Shaykh

Ahmad Assa'd'アレクサンドリア到着(列國會議方式への反對、宗主權の表明として。ヘディーヴおよびオラービー派との両面の取引き)。

六・一一 アレクサンドリア暴動、ヨーロッパ人に對する焼打ち、襲撃。バルルーディー内閣による秩序回復。

これ以後デルタ地帯農村におけるギリシア人高利貸排撃運動昂揚。

オラービー運動(一八七九—一八八二)の性格について

六・二三 コンスタンティノープルでトルコ不参加のまま列國會議開會。

七・四 バールデー内閣辭職→ラーギブ Isma'il Raghib 内閣、ただし國民黨の指導性かわらず。

七・一〇 トルコ、列國會議に参加。

(4) 第五期（一八八二・七～一八八二・九）

七・一一 英、アレクサンドリア砲撃（砲臺強化に對する警告、最後通牒にともなう措置として。ヘディーヴ、オラービーに抵抗命令。アレクサンドリアの破壊。エジプト軍撤收。ヘディーヴ、イギリス軍側へ逃亡し、オラービーへの叛徒宣言）。

七・二二 英議會、軍事費および軍隊派遣承認。

七・二五 列國會議中正宣言 *Protocole de Désintéressement*（いかなる國も領土的野心をもたない）調印。

七・二九 佛議會 臨時海軍費否決。ド・フレシネ内閣辭職→デュクレルク Duclerc 内閣

八・一四 列國會議解散。

八・一九 イギリス軍ポール・サイド上陸。

九・一三 タル・アルカビール Tall al-Kabir でのオラービー軍の敗北。

b 連關の把握

I エジプト近代史の段階區分

エジプトの近代・現代史はつぎの五つの段階において把えられる。

- (イ) 國際市場への結合と對應（九八～一八四〇）
- (ロ) 資本主義化の第一期（一八四〇～一八八二）
- (ハ) 資本主義化の第二期（一八八二～一九二二）
- (ニ)（寄生）地主・土着資本の確立期（一九二二～一九五二）
- (ホ) 「エジプト革命」期（一九五二～）

ここで必要な限りにおいて各段階の特徴點を示せば、つぎのごとくである。

(イ) ムハンマド・アリー Muhammad 'Alī の帝國建設の時期にあたる。スーダン支配とともにひらけてくる棉花栽培・奴隸貿易の發展。ハラージュ税 (kharāj) 制の中心的機能は、ファッラー（農民）fallāh の生産するすべての棉花を政府の定めた價格によつて國營倉庫に吸収することであり、棉花專賣制・貿易獨占制が國家財政の基盤をなす。<sup>(1)</sup>

(ロ) サイード Sa'īd・イスマール Ismā'īl の時代。スエズ運河の建設に象徵される時期。外資への依存が強まり財政の破綻は結局、英・佛二元管理を導入する。國際的從屬の深化、決定的從屬のつぎの段階の前提をなす。地租改正への着手。その一連の法令は、まずなによりも貿易獨占制の破壊にともなう地租増徴の要求、ついで農民經營の擴大・發展（殊にアメリカ南北戦争による綿飢饉 the Cotton Famine を契機とした棉作のきわだった發展）にもとづく農村共同體の變化によつて必然的なものとされた。

(ハ) イギリスの占領支配の時期にあたる。この時期のうち主要な部分を占め、かつこの段階の基本的方向を決定し

たのは、總領事兼外交代表クロマー卿 Lord Cromer (Sir Evelyn Baring) の統治である。エジプトの國際的地位の不安定（特に一九〇四年英佛協商まで）とイギリスによる主要軍事基地化とは、一定の意味でいわれる「恩惠政策」をうみ出した。その限りでは、アスワン・ダムはこの時期を象徴しうる。前段階の末期にまつたく混亂におちいつた地租改正がこの段階を通じて完成する。<sup>(3)</sup>これと平行して地主制の確立・土着工業資本の成立が見られる。

(二) エジプト王國の名目上の「獨立」に對應する。ワフド Ward とその亞流および宮廷諸派による政黨政治の展開。イギリスはその對エジプト政策を基本的には戰略的考慮の上に位置づける（一九二二年の留保條項、および一九三六年英エ同盟條約）。この時期に、地主の寄生化・ファッラーヒーンのプロレタリア化の著しい進行が注目され、資本のミスル系列および金融支配の確立が觀察される。

(三) 獨立の完成の時期にあたる。土地改革（第一次一九五二年、第二次一九六一年）と經濟開發計畫の實施にともない、農村の協同組合化の進行と國家資本の相對的に著しい擴大とが見られる。政策指導の面では、アラブ社會主義の目標がかかげられるに至っている。<sup>(4)</sup>

以上、特徴づけられた各段階を結ぶ轉機または背景、そしてむしろ轉換の要因は、つぎのように把えられる。

- (イ) の始期Ⅱナポレオン・ボナパルトの征服
- (イ) ↓ (ロ) Ⅱ東方問題の激化とそれとでのムハンマド・アリー<sup>(5)</sup>の敗北。具體的には一八四〇年ロンドン四國條約
- (ロ) ↓ (ハ) Ⅱオラービー運動、およびイギリスの單獨軍事占領
- (ハ) ↓ (ニ) Ⅱ一九一九〜一九二二年のワフド運動の高揚
- (ニ) ↓ (ホ) Ⅱ第二次世界大戰後、殊にパレステイナ戰爭後のムスリム同胞團 Al-Ikhwān al-Muslimūn から共產黨へ

## 至る大衆運動、轉換のイニシャティヴを握つたのは自由將校團 Al-Dubbāt al-Hurriyah

これまでの問題整理に即してオラービー運動をとりあげるならば、それは單に(四)の轉換であつたばかりではない。オラービー運動とその壞滅は、それ以後七五年にわたつて展開するイギリス占領支配體制の成立の契機およびそれへの規定條件をなし、積極的にはこの支配體制のもとで現代エジプト社會の基底が形成されてきたとすれば、エジプト現代史の主要モメントの發展における起點をなすとみることが出来る<sup>(6)</sup>。オラービー運動を現代エジプト民族運動の出發點もしくは先驅として記念するエジプト民族主義の立場も、この問題に對應した意識として説明できよう。

### Ⅱ オラービー運動の國際的連關

Aaでのべたごとく、オラービー運動はひとつの孤立した一國的な過程として把えることはできない。ヨーロッパ外交においては、オラービー運動とそれをめぐる諸問題は、「エジプト問題」または「エジプト事件」として重大な意味をもつた。

ロシアの南進政策の激化を契機として締結された一八七八年のベルリン條約ののち、「東方問題」の焦點はまさにエジプトにあつた。一八七五年、ヘディーヴ所有の株券買収によりスエズ運河會社に對する發言權を強化してから、フランスとともにエジプトに對する財政監督權を通じて干渉を強めてきていたイギリスは、ここで、實にグラッドストン自由黨政府の決定において、エジプト單獨占領政策にふみきつたのである。オラービー運動に對應する政策決定の基本的立場において、フランス外交は投資家の利害擁護と英・佛協力に重點をおいたのに對し、イギリス外交はインドへのルートの安全確保とそこから必然的に生じる獨占の要求に重點をおいたのであつた<sup>(8)</sup>。

對エジプト干渉における英佛の協調と對立の背景には、オスマン帝國を含むヨーロッパ諸國間の諸利害關係の交錯

があり、これを操つてイギリスのエジプト單獨占領の方向へ誘導したのは、ビスマルク外交であつた。<sup>(9)</sup>一八八二年七月以後のイギリスの對エジプト積極干涉は、同年五月成立した三國同盟によつて支えられていたと説明することもできる。このことはビスマルクのいわゆる「保障」體制の完成と危機とを表現している。この體制を保持するためにはヨーロッパの枠内の外交體系をこえ出ざるをえず、それはアジアやアフリカへの犠牲の強要を擴大しつつ強國間の對立を收拾しがたくさせ、「保障」は解體の方向へ進まざるをえない。

以上、「エジプト事件」の處理における重要モメントを、帝國主義時代への移行を示す特徴點として指摘した。なおこのことに關連して、「エジプト事件」をただ傳統的な「東方問題」の脈絡の上で理解するだけでなく、<sup>(10)</sup>アフリカ分割史のなかで、ないしは「アフリカ分割」の端緒として扱うべきであるという點にもふれなければならない。「エジプト事件」をさかいとして、ドイツのアフリカ植民帝國建設の努力が突如として動きはじめたのであり、一八八四と五年のベルリン會議（いわゆるコンゴ會議）はアフリカの全面「分割」の大勢を決定的にした。こうしてアフリカでは、「分割問題」に媒介されない領土獲得はありえなくなつたのである。この場合、ヘディヴ・イスマール<sup>(11)</sup>の帝國のアフリカ國家としての意義とオラービー運動とならんでスーダーンに發生したマフディー國家 Mandiyah の役割とが、あらためて検討されなければならない。

ここまでの問題設定からすると、オラービー運動の國際的連關は、はなはだ多角的にとりあげられざるをえず、その構圖はつぎのような規模をとることとならう。

(4) オスマン國家の立憲運動

一八七六年二月二三日公布されたカヌーニ・エサスィ<sup>(12)</sup> Kanun-i Esasi ぐわゆる「ミナハト Mihāt

Pasha 憲法は、エジプトのオラービー運動期の立憲運動に對して重大な影響を與えている。そしてオスマン帝國宮廷のオラービー運動に對する政策を基本的にしはつてゐるものは、スルタン、アブデュル・ハミト二世 Abdülhamid II がすでに憲法と議會を停止して專制を開始してゐる事實と、そしてオスマン帝國のいかなる領域内でも立憲運動を否認する要求とであつた。一八八一年エジプトの農民出身將校の運動が注目されるようになった段階は、まさにミトハト・パシヤらの裁判の時期でもあつた。<sup>(13)</sup>

ここでさらに課題として擧げておかななくてはならないのは、トルコとエジプトの立憲運動、ないしは反スルタン・反ヘディーヴ運動の對比である。ミトハト・パシヤとシャリーフ・パシヤ Sharif Bāshā の役割の一定の類似性、イエニ・オスマンルラル（新オスマン協會）Yeni Osmanlılar、《Jeunes Turcs》と國民黨 al-Hizb al-Watani あるいはジャマール・アッディーン・アルアフガーニー Jamāl al-Dīn al-Afghānī ムハンマド・アブドゥフ Muḥammad ‘Abduh などの對比、ミトハトに對するナムイク・ケマル Namık Kemal、ズィヤ Ziya の場合とシャリーフに對する國民黨主流の場合との比較が問題となりうる。<sup>(14)</sup> また一八六〇年代以降のトルコとエジプトの自由主義派の結集は、相互に連絡や影響をもつており、組織形態でも共通した面がある。<sup>(15)</sup> アブデュル・ハミトもタウフィク Tawfiq も自由主義派と關係をもち、その登位は歓迎されながら、期待を完全に裏切ることになるのである。つぎに、一八七六年において四カ月の間にアブデュル・アズィズ Abdülaziz とムラト Murad の二人のスルタンが廢位されたことは、エジプトの反ヘディーヴ運動に對して異常な刺戟を與えたことは疑う餘地がないが、同時にそのことがヘディーヴの行動様式にも決定的に作用していることに注意しなければならない。一八七六年五月のトルコの運動の主力が神學生の fih たちであつたのに對して、一八八一年九月のエジプトのそれが軍隊であつたことも分析す

べき問題である。以上のべてきたような對比の作業にあたつて、特に注意すべき點は、それらへの國際的干涉の段階が急速にちがつてきているということであらう。

(四) フランスのチュニス占領

フランスのチュニス占領は、一八八一年四月～五月はじめにかけておこなわれ、五月一二日の條約でベイ Bik にフランスの保護權を無條件に受入れさせるに至つた。抵抗はむしろそれから起つてくるのである。政府の度重なる交替にもかかわらず、フランスの對エジプト政策の立案にあたつては、つねにチュニア問題が背景にあつた。すわなち、オラービー運動に對する態度も、オスマン帝國のエジプト干涉（宗主權の行使）の可能性や特にイタリヤ・ドイツを含むヨーロッパ外交での孤立化の危險性への對策も、すべてチュニアの治安および國際的地位の安定化の問題ときり離しえないからであつた。

チュニアの事態は、まただちにオラービー運動のがわに反響した。<sup>(16)</sup>オラービーらのスルタンに對する一應忠誠を誓う態度は、スルタンとエジプトとの關係を維持することの重要性の判斷にもとづいており、それはチュニアの教訓としてひき出されたものであつた。<sup>(17)</sup>

(イ) アイルランド問題

アイルランドの民族鬭争の激化にともなうグラッドストーン政府の政策轉換と、そのエジプトに對する干涉の積極化・單獨占領政策の追求とは、密接に連關している。

一八七九年一〇月、アイルランド國民土地同盟 Irish National Land League が結成され、不當な地代の支拂拒否と新土地法の獲得をスローガンとしていわゆる土地戦争 Land War が展開されるに至つた。一八八一年末か



ら一八八二年にかけてそれは絶頂に達し、三月、土地同盟は鎮壓法 Coercion Act によつて非合法化された。その上で、パーネル Ch. S. Parnell らの舊國民黨系の中間層との妥協で、五月二日キルメンハム協定 Kilmmainham Treaty が結ばれ、グラッドストンの「和解政策」は成功するかに見えた。しかし五月七日新總督キャヴェンディッシュ Lord Cavendish 暗殺事件が発生し、グラッドストン政府は辭職か彈壓かの岐路に直面してついに戒嚴令による大彈壓に轉換したのである。

「もし私のえた情報が正しいなら、アイルランドにおける彈壓政策とエジプト干涉の政策とは、五月第二週の同じ閣議の席で決定されたものである。」<sup>(18)</sup>

このブランドの証言は、はなはだ示唆的である。まさしくイギリスはふたつの軍事行動を併行して進めたのであつた。

このうち、エジプトとアイルランドの民族主義者の間に、しばしば共感や連帶の感情がとりかわされたことについては、ここであらためて想起しておいてよい。<sup>(19)</sup>

## (二) インド統治の動向

イギリスの政策決定において、インドに對する考慮の比重がこの場合もいかに大きいかということは、ここでは特に問題にしない。ここではむしろ、オラービー運動への對策に關して、エジプト現地でのイギリス人官吏の活動には、インドにおけるリボン Marquis of Ripon の改革（一八八〇—八四）の方向がかなり強く影響しているという點を指摘しておく。これは英・佛共同覺書 Note identique に對するエジプト駐在イギリス外交官の當初の反對意見<sup>(20)</sup>や、ダファリン Dufferin、ノースブルック Northbrook、クロマー Cromer らのエジプト政治體制再編の計畫<sup>(21)</sup>

によつて、證明されうる。これらのすべてがインドでの行政官としての經驗をもつてゐること、なかんづくクローマ  
ーは、オラービー運動の展開期に財政擔當官としてエジプトだけでなく一時インドでも勤務したことは、注意すべき  
である。

(ハ) スーダーンのマフディー運動

エジプト治下のスーダーンで、オラービー運動とはほぼ同時にマフディー運動が発生した。ムハンマド・アフマド・ア  
ルマフディー Muhammad Ahmad al-Mahdi のマフディー宣言は一八八一年六月であり、そのジハード Jihād の  
要求はしだいにスーダーン大衆をとらえて、オラービー運動敗退の一八八二年九月にはアル・ウバイド Al-Ubaydī  
攻撃が開始され、その陥落は一八八三年一月であつた。マフディー運動の初期の發展にとつてエジプトの情勢がこれ  
を大きく利する形で作用したことは明らかである。オラービー運動を無視してマフディー國家の成立を論じることが  
できない。<sup>(22)</sup>

マフディー運動のがわからは、オラービー運動も排撃されるべきトルコ支配の一部であつたはずであるが、オラー  
ビー運動のがわからのマフディー運動に對する政策は、十分明確化されないまま終つてしまつた。もつとも一八八  
二年三月、國民黨の政府はムハンマド・ラウフ Muhammad Ra'uf にかえてアブド・アルカーデル・ヒルミ  
ー 'Abd al-Qādir al-Himī をスーダーン總督に任命したのであり、少くともその意圖は積極的な鎮定にあつたこ  
とはたしかである。<sup>(23)</sup> またこの間、事實上現地地の指揮にあたつていたドイツ人技師ギークラー Giegler Bastā には、  
カイロの政府は白紙委任狀を與えて、完敗に歸したその大規模な作戦を承認した形となつた。<sup>(24)</sup> そしてブロードリーの  
記述するところでは、囚人としてのオラービーの發言はつぎの通りであつたとされている。<sup>(25)</sup>

「スーダンのマフディーはアラブの敵である。なんとすれば、われらは彼がいかにさま師であることを知っているから。われらはイスラムの正統派<sup>スンナ</sup>で、イスラムの救世主は余もそれに属するところのクライシュのアラブ族から出ることを信じる。すべてのエジプト人は危険な敵としてマフディーに抵抗すべきである。だが國じゆうをおおうこの混亂は、かのアフリカのダルウィーシュにすら成功のチャンスを与えるであろう。」

ブロードリーの聴取は一八八二年一〇月末のことと推定されるが、この記述の信頼度をここで検討することは、ほとんど意味ないと考えられる。なぜなら少くとも運動の過程においては、このような問題の立て方が前面におし出されたことはなかつたからである。このオラービーの發言がそのまま利用される場合でも、おそらく最後の豫言的部分にもつとも力點があるとされるべきであろう。

以上のごとき問題に對して、つぎのような事實がもつ意義をもつと吟味する必要がある。すなわち、オラービー運動の支持者でハルトウームに追放されたアフマド・アルアッワム Ahmad al-Awwam はエジプトの出來事を記述し、これをマフディーがわにひき渡した。このかどで彼は死刑にされたが、のちに彼の仕事はウムドゥルマーンでマフディー政府により石版印刷に付されたといふ<sup>(26)</sup>。またつぎの項でとりあげるように、オラービー運動が挫折したあとでのアフガーニーなりアブドゥフのマフディー運動の積極的評價がある。さらにオラービーのもつとも有力な協力者、アブド・アルアール 'Abd al-'Al の黒人連隊<sup>(27)</sup>のオラービー運動の中での役割、およびこれをめぐる意識の問題もあげられなければならない。

#### (6) いわゆる汎イスラム主義の視野

この問題に接近するための必須の材料は、前後してエジプトを追われたジャマール・アッディーン・アルアフガー

ニーとムハンマド・アブドゥフとがパリにおいて設立した團體、アル・オルワ・アルウスカー（固きまらずな）*Al-Urwah al-Wuthqā* の同名の機關誌である。<sup>(28)</sup>それはアブドゥフによつて編集され、一八八四年三月一三日から同年一〇月一六日の間に一八回發行された。この評論のイスラム世界に對する影響力については、すでにそして最近特に注目されている。<sup>(29)</sup>

それが扱つてゐる問題ははなはだ廣範圍で、エジプトの問題が主要部分をなしているけれども、そのひろがりは一ダーン、インド、ナジユド、アフガニスタン、インドシナ、ヨーロッパ諸國等々に及ぶのである。<sup>(30)</sup>オラービー運動の敗北の原因を追求することは、<sup>(31)</sup>單にエジプトの内部分裂の痛烈な批判にとどまらず、アジア諸國、そしてスーダンやアイルランドの相互にきり離された人民の諸運動の連帶と團結の訴へへと發展して行く。<sup>(32)</sup>いわゆる汎イスラム主義は、ここではむしろ被抑壓民族の連帶感を基盤とする反帝國主義思想と呼ばれるべきであらう。<sup>(33)</sup>アフガーニーの思想の發展において、具體的な國際情勢分析と具體的な協同蜂起の呼びかけとが、こうして明確になつた契機は、オラービー運動の經驗であつたといわなくてはならない。<sup>(34)</sup>それはオラービー運動が客觀的にになつてゐた、もしくは課題として背負うことになつた國際的連關が、イスラムの普遍性・一體性の觀念を媒介として投影されたものであつた。なお彼らの情勢判斷を支える情報のソースに注意しなければならぬ。ここでヨーロッパとは質を異にしたコミュニケーションが析出されるのである。<sup>(35)</sup>メッカへの道やアル・アズハル大學などの傳統的な媒體のほかに、亡命・遍歴によるアフガーニー的な組織方法とサークル間の交流とがあげられる。このようなコミュニケーションの側面から見れば、すでにA b II (回)でもふれたように、オラービー運動それ自體とイスラム的・アラブ的周圍との關係に新しい光をあてることができであらう。

## (ト) シリア人の活動

オラービー運動においては、エジプト人 Misri の意識が強調されたが、これに對してアラブ al-Arab の意識は十分明瞭ではなかつた。しかしシリアからの亡命者・移住者の運動への参加は顯著であり、特にジャーナリズムでの活動が注目される。<sup>(36)</sup> アディーブ・イスハーク Adib Ishāq がこれを代表している。彼らの場合も、シリア人としての立場で参加しているよりは、「エジプト人」の中に集約されているのであるが、それにしても彼らの活動はシリアでの反トルコ運動と當然のことながら密接に關係している。一八八〇年のシリアでの非合法ポスター運動とそのメンバーのエジプトへの逃亡とは、G・アントニウスの調査によつて知られている。<sup>(37)</sup>

こうしてオラービー運動は、直接スルタン権力と折衝・對決した面だけでなく、シリアの知識人秘密結社の運動のヒンターランドとして、オスマン帝國アジア領域の支配強化にのぞむスルタン権力と對應した面をも考慮されなければならないのである。

以上、(イ)から(ト)まであげた問題の立て方とは別に、オラービー運動をその後のイラン、トルコ、インドの諸民族運動と比較することは當然必要な視點である。またわれわれにとつて、日本のまさに同時代の自由民権運動・條約改正運動あるいは竹橋事件などと對比することは、はなはだ重要なテーマであり、まさにわれわれの課題であるが、これは別に論じなければならない。

これまでのべてきたことによつて、オラービー運動を國內的發展の局面に限定してその國際的連關を無視することができないというのは、決してただ事件の發生から終末までヨーロッパがわの干涉にさらされているというような條件があるからではないことが明らかになつたと思う。それは、資本主義世界にくみこまれたものとしての一九世紀エ

ジプト社會の構造の問題に關係があり、また相互に無關係な諸運動が客觀的にまつたく密接した連關をもたざるをえず、そればかりかその連關が自覺されはじめる新しい世界史的段階に關係があると考えられる。この後者の點は、帝國主義時代の開幕ということであり、帝國主義の歴史的研究にとつても、オラービー運動の性格把握にとつても、以上のような觀點での作業が必要なのである。

### c 課題の整理

A bにおいて問題とした連關の把握は、オラービー運動の歴史的性格を論ずる上で、從來のこの運動の扱い方に對する批判を前提としている。これまでオラービー運動に關するモノグラフィはなく、それは主として(イ)外交史、(ロ)民族運動史のなかでふれられてきたにすぎない。

(イ) その主題は、イギリス單獨占領の原因論・責任論であつたといえる。それは一八八二年以後、帝國主義的對立を反映しながらえんえんと續けられたエジプトの法的地位に關する議論と關係があつた。<sup>(38)</sup>それを單純化していえば、ダファリンのプログラムや<sup>(39)</sup>「スルタンひねくれとフランスの動搖とによつて、單獨の干涉は、それを終始一貫、回避するために努力した一國に、無情にもおしつけられたのであつた」<sup>(40)</sup>というモーリーの見解をめぐつて、その辨護と論駁が展開されたのである。このような動向に對して、J・A・ホブソンのつぎのような批判も提起される。<sup>(41)</sup>

「イギリスのエジプト占領に對して公然と示された理由は、我が國自身の利害關係に影響ある軍事上及び財政上のものであつたに拘らず、今では、エジプト人が我々の支配から受けた諸々の便宜を與えるために我々はそこに赴いたのだということ、竝に、我々が與えたその國から數年の短期間以内に撤退するという約束を守るとは明らかに

我々の罪惡であるということが、普通一般に主張されている。通常のイギリス人は、『エジプトの農夫はその歴史上曾て、彼の利益を増進しもしくは彼の權利を保護するためかくも氣を配る政府の下に住んだことはなかつた』ということを読む時、彼は本能的に叫ぶのである。『そうだ。それこそ我々がエジプトに出かけた目的だ。』と。ところが事實について言えば、我々をそこに運んだ『帝國主義』の活動は全く別の考慮によつて決定されたのである。しかしその後、外交史料操作にもとづく客觀的な研究においても、オラービー運動自體は、エジプト内部の政治的混亂として、ないしはヨーロッパ的事件の背景として、平板に扱われざるをえなかつた。<sup>(42)</sup>これは國際政治史からする帝國主義研究に對して重大な反省を迫る事柄であるように思われる。

(四) エジプトの民族運動史において、オラービー運動、一九一九年、一九五二年は劃期的な三つの段階であり、それらは民族主義の歴史意識によつて、完成への積み重ねとして説明されうような課題の連續性を示している。このことによつて、オラービー運動を一九五二年の自由將校團の運動との關係において、アナロジカルな觀點から問題にすることが、異なつた立場を貫く共通の傾向として見られるようになる。一方での中心問題は、エジプト民族運動における軍隊もしくは青年將校の役割、ファナティックなイスラム意識、および戰爭を通じて暴露された支配體制の腐敗と弛緩などである。<sup>(43)</sup>他方では、抵抗の傳統が中心問題であり、「帝國主義」と國王(ないしヘディウ)への鬭爭の教訓がひき出される。<sup>(44)</sup>オラービー運動の歴史的品格を明らかにすることは、ただこれらの仕事の線上ではなく、これらの見方が成立ちうることの意味を検討することによつて可能であらう。

最近、近代エジプトの政治思想史研究への着手がようやく本格的になつてきた段階で、思想的な面からオラービー運動の位置づけが問題となつてきた。たとえば Nadev Safran : Egypt in search of Political Community,

an Analysis of the Intellectual and Political Evolution of Egypt, 1804~1952, Harvard Univ. Press, 1961. は、一八八二年〜一九二二年を近代エジプトの形成期としている點や、「アフガーニー主義者や立憲主義者の活動をオラービー革命の主要な筋書きの中でそれほど重要でないエピソードとしてみる」傾向に反對して大幅な評價改訂を主張している點で「注意をひく業績である。またそれより早く」 Jacob M. Landau : *Parliaments and Parties in Egypt*, 1954. は「はじめてオラービー運動の立憲運動としての側面を整理したものであった。これらはオラービー運動の研究に新しい道をひらくものであるが、いまだにひとつの概括的な提案や個別の特殊な側面だけに限定された問題提起にとどまっているといわなければならない。

全面的な展望をおこなうにあたって最大の難問は、經濟史的研究の困難である。法令や調査報告、たとえば *Commission Supérieure d'Enquête, Rapport Préliminaire adressé à S. A. le Khédive*, 1878. や *Commission Supérieure d'Enquête, Rapport concernant le Règlement Provisoire de la Situation Financière*, 1879. などの *Notes Explicatives pour la Commission de Liquidation*, 1880. 等の史料から「實態への推論をおこなえる可能性はいちじるしく限定されている。特にオラービー運動と農村の問題については、なおなによりも農村自體の發展の具體的把握が作業の前提として必要であり」 Gabriel Baer : *A History of Landownership in Modern Egypt*, 1800~1950, 1962. のような仕事が前進させられなければならない。

以上のような状況にもかかわらず、エジプト近代史ないしはアラブ近代史の研究において、オラービー運動の歴史的性格に關する假説的な問題設定は、不可缺で緊急の課題となつてゐる。W・S・ブランドンやA・M・ブロードリーが蒐集・記録した豊富な諸史料<sup>(45)</sup>、オラービーの回想録 *Mudhakkirāt 'Uṭābī* すべにA 911(7)に言及した *Al-Urwah*



al-wuthqā<sup>(4)</sup> などを活用して、オラービー運動を全體としてできるだけ総合的に問題にし、性格の粹づけを試みるこ  
とができるように、そのための當面第一の作業として、まず特に運動の指導の面から運動の性格を問題にすることと  
する。すでにbīおよびīで明らかにしたごとく、運動の主體的側面を客觀的な條件のもとでどう積極的に把握す  
るかという課題がこの場合特に重大だからである。

- 1 Helen Anne B. Rivlin: *The Agricultural Policy of Muhammad 'Alī in Egypt*, 1961. Chap. VI, VII.
- 2 Binder: *Bankers and Pashas*, 1957. Tables. 中岡・板垣『アラブの現代史』(一九五九)14頁の第2表
- 3 Earl of Cromer: *Modern Egypt*, Part VI, Chap XLIX, L, LI, LIII.
- 4 板垣雄三「エジプト近代化政策の現段階」(アジエ經濟研究所『アラブ諸國の社會經濟機構』一九六〇年、所收)
- 5 平凡社『世界歴史事典・史料篇・西洋Ⅱ』に板垣の譯あり。
- 6 叙述におけるこのような構成をはじめとつたのは、中岡・板垣『アラブの現代史』(一九五九)。ついで Nadev Safran: *Egypt in Search of Political Community*, 1961.
- 7 Jamal 'Abd al-Nasir, *Al-falsafah al-thawrah*.
- 8 板垣雄三「アラビ叛亂をめぐって」(マスター論文(手稿))。Achille Birovès: *Français et Anglais en Egypte*, 1881~82, 1910. はこの観点から注目に値する研究である。
- 9 同右。Grosse Politik, Bd. 4, Nr. 729. Maximilian von Hagen: *England und Ägypten, mit besonderer Rücksicht auf Bismarcks Ägyptenpolitik*, 1915.
- 10 たとえば一八八二年においてマルクスやエンゲルスも「エジプト問題」をロシアの動きに焦点をあわせて見ている。全集(改造社版第20巻)往復書簡参照。
- 11 最近のホルトの業績によつてかなり明らかになってきた。P. M. Holt: *The Mandist State in the Sudan, 1881—1898*,

1958. Do. — : A Modern History of the Sudan, 1961.
- 21 G. Jäschke : Die Entwicklung des Osmanischen Verfassungsstaates, 1918. 《Dustūr》 by B. Lewis in *Encyclopaedia of Islam*. 卷48 L. Léouzon le Duc : Midhat Pacha, 1877, pp. 197~220; Ali Haydar Midhat Bey : Midhat-Pacha, sa vie son œuvre, 1908 pp. 243~260 にその傳記がキメントあつて。
- 23 Wilfrid Scawen Blunt : Secret History of the English Occupation of Egypt, 1907, pp. 54~55
- 24 Bernard Lewis : The Emergence of Modern Turkey, 1961, pp. 126~170. E. E. Ramsaur, Jr. : The Young Turks, 1957, Chap. 1 參照。
- 25 Lewis : *ibid.* p. 149. M. Colombe : Une Lettre d'un Prince égyptien du XIXe siècle au Sultan Ottoman Abd al-Aziz, Orient, v (1958), 23—38, 25頁に「オスマンナル活動家のバトロンデイン・ラーヒーム・パシヤの息子、ムスタファ・ムハンマド・ムスタファ・ファズル」を注記する。
- 26 W. S. Blunt : *op. cit.* p. 164. 25頁に「ラー・フッラー・ブン・ナディームの活動の叙述」。
- 27 W. S. Blunt : *op. cit.* p. 172.
- 28 W. S. Blunt : *op. cit.* p. 265.
- 29 Al-'Urwah al-wuthqā, p. 285. ノーニン『帝國主義論ノート』(大月・ローニン全集39卷) 49頁。
- 20 Cromer : *op. cit.* pp. 170~173. 總領事マレット・マレットの12月30日電報「およびホルツァイン A. Colvin のメモランダム。後者ではつきのようなべられる。」「私が勧告する方針は、エジプトがその内部再編成をおこなおうとする危急の際に、列強がそれぞれ所有し、また保持しようとするところの物質的利害を公然かつ斷乎として確認することであり、そして列強がすでに獲得している地位をおかさない範圍において、エジプト人には内政においてその欲するところの措置をとる自由を残しておくことである。』」
- 21 Cromer : *op. cit.* chap. XLIV, XLV. 24頁 Al-'urwah al-wuthqā, p. 297, 361—365, 391—393 25頁に「このイギリス

の政策なげし政略のへりかえしが説かれる。ゆゑに S. Gopal: *The Viceroyalty of Lord Ripon*, 1953, Chap. VI, VIII, IX, XIV. 参照。

- 22 P. M. Holt: *A Modern Hist. of the Sudan*, p. 76.
- 23 P. M. Holt: *The Mahdist State in the Sudan*, pp. 58~61.
- 24 Holt: *ibid.* pp. 58~60.
- 25 A. M. Bradley: *How we defended Arābi and his Friends*, 1884, p. 496.
- 26 Holt: *A Modern Hist. of the Sudan*, p. 216, Note I. for Chap. VI.
- 27 Bradley: *op. cit.* pp. 497~8.
- 28 本稿において利用したテキストは 'Al-wurwah al-uthqā, Al-Maktabah al-Ahlyah, 1346=1927.
- 29 E. G. Browne: *The Persian Revolution of 1905~09*, 1910, Chap. I. Jamal Mohammed Ahmed: *The Intellectual Origins of Egyptian Nationalism*, 1960, p. 27~30. 加賀谷寛「西マシフにおけるナショナリズム—アフガーニーのペン・イスラミズムを中心として」『思想』一九六〇年一二號)。
- 30 記事のタイトルによつてこれを示すと、(かつこの中は頁數)  
キリスト教とイスラムとそれらの民族(61)、ヘルシア人はアフガンとの同盟を求める(189)、東洋でのイギリスの政策(255)ゴル  
ドン・パシヤ(267)、グラハムとオスマーン・ディグマ(269)、スーダーンの求めにこたえるもの(278)、イギリスの議會(280)、  
アイルランド(285)、トンキンでのフランス人(286)、紅海沿岸におけるイギリス(306)、ナシユド(365)、インドの新聞インドに  
おけるイギリスの行爲(379)、トルコ(439)、それらがイギリス人であり、これらが彼らの意見である(456)、ラホール(480)
- 31 ムスリムの衰頹・かれらの沈黙とその理由(72) 憶病(238)、エジプト(259)
- 32 イスラムの統一(130)、抵抗・抵抗(404)
- 33 中岡・板垣前掲書 119—121頁

オラービー運動(一八七九—一八八二)の性格について

- 34 Al-'urwah al-wuthqā に付せられた Muṣṭafa 'Abd al-Raziq の解説は、この點を強調している。
- 35 たゞ、このノースメンタ卿・ロジンの新しい支配者(即ち)のインパクトを、このノースメンタの扱い方。
- 36 Hartmann : The Arabic Press of Egypt, pp. 9—10.
- 37 G. Antonius : The Arab Awakening, 1938. Chap II.
- 38 この二つの組織の扱ひは、到底いふまでもなく、主眼が、そのを導く Lord Milner : England in Egypt, 1892. A. Colvin : The Making of Modern Egypt, 1906. A. Z. (?) : L'Émancipation de l'Égypte. E. Planchut : L'Égypte et l'Occupation anglaise, 1889. De Freycinet : La Question d'Égypte, 1905. J. Cocheris : Situations Internationales de l'Égypte et du Soudan, 1903. V. Chirol : The Egyptian Problem, 1921.
- 39 Cromer : op. cit. chap. IV
- 40 John Morley : Life of Gladstone. Vol. III p. 80.
- 41 J. A. Hobson : Imperialism, a study. の矢内原忠雄譯(岩波文庫)下巻一〇七頁以下。
- 42 その最悪の例の「The Cambridge Hist. of British Foreign Policy. Vol. III. なお日本では、神川彦松『近代國際政治史』下巻一が比較的よく、このロジンの動向を問題としていふ。
- 43 Majid Khadduri : The Army Officer, His Role in Middle Eastern Politics, in S. N. Fisher(ed.) : Social Forces in Middle East, 1958. P. J. Vatikiotis : The Egyptian Army in Politics, 1961. など。E. J. Stanley : 『帝國主義の終末』のこの線に於て。
- 44 たゞ、Shuhdi 'Atiya al-Shāfi' : Tawwūr al-harakah al-waṭaniyah al-miṣriyah, 1959. Ḥasan Ḥāfiẓ : Al-thawrah al-'urābiyah fi-l-mizān (Kutub gawmiyah). Muḥammad Muṣṭafa 'Alī : Miṣr baina thauratna (Ikhṭarnā lak, 16).
- 45 W. S. Blunt : Secret History of the English Occupation of Egypt. は、ロジンの日記、オラービーの自傳、フレックサントリア暴動關係の諸證言、オラービーの書簡、サブンシー Sabunji の通信、グラッドストーンとタイムズ紙に提供された國

民黨プログラム、一八八二年憲法の英文テキスト、レセツプスの書簡、ニネット J. Ninet の證言などを含んでおり、叙述それ自體もオラービー運動の同情・協力者のメモワールとして價值がある。ブラントはモーリーへの批判としてこれをまとめ、ブラントへの反論をこめてクロマーが Modern Egypt を書いたという關連がある。

A. M. Broadley: How we defended Arabi. はオラービーの辨護人の立場で、裁判の經過を記述すると共に、その間にえた證據資料（トルコ宮廷との接觸を示す通信、地方有力者の請願建白等）、調書、證言、辨明書、聴取りなどを收録している。運動指導者に關して、ブラントのものはオラービーにかたよつてゐるきらいがあるが、それはブロードリーのものが廣く重要な指導者全般を辨護依頼人として扱つてゐることによつて補われうる。

46 'Abd al-Rahmān al-Ra'fī: Al-thawrah al-'urābiyah wa-l-ihlāl al-injizī, 1949. 又 Muḥammad Sabry: La Genèse de l'Esprit National Egyptien, 1863~82. は史料および素材を豊富に含んだ文獻として特に重要である。

(補注) 本論文の仕上げの時期に、オラービー運動の資料に關する紹介があらわれた。Robert L. Tignor: Some Materials for a History of the 'Arabi Revolution, a Bibliographical Survey (The Middle East Journal, Spring-1962, pp. 239~248). 網羅的なリストであるが、はなはだ有益である。

## B 運動の組織と形態

### a 國民黨の成立と組織原理

國民黨 al-hizb al-waṭani の成立を準備し、その基盤となつたのは、一八七〇年代を通じての秘密結社の運動であつたと考えられる。その實態をつかむことは困難であるが、主要な據點として、(イ)ジャマル・アッディーン・アルアフガーニーを中心とするもの、(ロ)軍隊の秘密グループ、(ハ)ハリーム・パシャ Halim Pasha と連絡をもつもの、

オラービー運動（一八七九—一八八二）の性格について

の三つが擧げられる。

- (イ) アフガーニーは一八七一年から一八七九年追放されるまでのエジプト滞在期間中、各階級・各層との多様な接觸によつて、はかり知れぬ大きな政治的煽動をおこなつたが、彼の設立した秘密組織である程度知られうるのは、フリーメイソンの組織である。<sup>(1)</sup>一八七六年または七七年以後、彼はそのアレクサンドリア支部を主宰したといわれる。この新支部はイタリアのフリーメイソンの援助で設立され、イギリス人領事でその有力な一員だつたラファエル・ボグ Raphael Borg の助言により、イギリスのグラント・ロッジのもとで東方の星組織 オクタル・システム Kawkab al-Sharq に屬した。この支部は三〇〇名のメンバーを擁し、そのうち有力者はつぎのごとくであつた。ムハンマド・アブドゥフ、ヤアクープ・サンヌーア Ya'qub Sannū', アブド・アッサラーム・アルムワイリヒー 'Abd al-Salām al-Muwailihī のちのヘディーヴ、タウフィーク Tawfiq' シャリーフ・パシャ Sharif Bashā' スライマーン・アバザ Sulaimān Abāza' アディーブ・イスハーク Adīb Ishāq' ラティーフ・サリーム Latīf Salīm 等々。
- (ロ) 軍隊の秘密グループの組織者はアリー・アッルービー 'Alī al-Rūbī' で、<sup>(2)</sup>アフマド・オラービー、アリー・ファフミー 'Alī Fahmī, アブド・アルアール 'Abd al-'Alī らはあとから参加したと考えられる。<sup>(3)</sup>その結成がいつかは不明。
- (ハ) ハリーム・パシャは、一八六六年イスマールがトルコ宮廷からヘディーヴの稱號と世襲法を獲得してから、ヘディーヴ位への可能性を奪われて不満・陰謀分子となり、一八六八年追放されて、それ以後コンスタンティノープルから工作をおこなつた。<sup>(4)</sup>その対象は、主として(イ)および(ロ)であつたと思われる。

一八七九年三月〜四月、國民黨ないし祖國協會 al-Jam'iyah al-Wataniyah が成立したとき、その本部はヒルワ

イン Hilwān におかれたがメンバーの名前は秘密にされた。農民出身將校のグループ、オラマーからはサイイド・アリー・アルバクリー al-Sayyid 'Alī al-Bakrī' 名士ではイスマール・ラーギブ・パシヤ Ismā'īl Rāghib Bāshā' スルターン・パシヤ Sultān Bāshā, アル・シヤルキーヤの知事 Mudir Slaymānīn・アバーザ、ミニヤの知事ハサン・アッシユライイー Hasan al-Shurayī' の動きが顯著であり、シャリーフ・パシヤやオマル・ルトフィー 'Umar Lutfī も加わる。<sup>(5)</sup> 祖國憲章 Al-Lā'ihah al-Wataniyah の文案をわつたのは、イスマール・ラー

將校	93	28.44%
官吏	72	22.02%
名士會議々員	60	18.35%
宗教關係代表者	60	18.35%
名士および商人	42	12.84%
	327	100. %

ギブの家に集つたシャリーフ・パシヤ、シャビーーン・パシヤ Shāhin Bāshā' ハサン・ラースイム・パシヤ Hasan Rāsim Bāshā' ジャアフナル・パシヤ Jafar Bāshā' アリー・アルバクリー、アッ・シャイフ・アルハルファウイー al-Shaykh al-Khalfawī' アッ・シャイフ・アルアダウイー al-Shaykh al-'Adawī などもつた。<sup>(6)</sup>

祖國憲章への署名者、三二七名はアッ・ラーフィイーによつて上記のように分類されている。<sup>(7)</sup>

名士會議 Majlis Shur'at-Nuwwāb の議員總數は七五名であるから、署名議員はその八〇%に達したことになる。また宗教關係代表者には少數であるがユダヤ教およびコプトの指導者を含んでいる。

祖國憲章の起草者および署名者から推定して國民黨の成立は驚くべき廣範圍な戦線の結集を意味したと結論してよからう。そしてこのことは同時に、その結合の特殊性とゆるやかさを示している。農民出身將校、農村シャイフか

ら、トルコ人高級官吏としてヘディーヴの推定相續人タウフィークへとつながり、ある一定部分はヘディーヴと緊密な連絡を保っているという複雑な構成である。もちろん、ヘディーヴ・イスマール・イルの退位を契機としてシャリーフ・パシャに代表されるこの後半の上級部分は、組織的にきれ、農民出身將校のイニシヤティヴが確立されて行くのであるが、その場合でもマフムード・サーミー・アルバールデー・Mahmūd Sami al-Bārūdī やアリー・ムバラク・パシャ 'Ali Mubārak Bāshā との連結は逆に強化されるのである。<sup>(8)</sup>

國民黨成立において、つぎの三つの主導的な要素とそれぞれの敵對目標があつたと考えられる。

(イ) 農民出身將校

二・一八事件のちをオラービー自身が回想するところでは、「われわれ(アン・ナーデー・al-Nādir、フリー・ルビーら)は別れる前に會合をひらき、そこで私は皆が團結してイスマール・イルを廢すべきだと提案した。領事たちはともかくイスマール・イルが除かれることは喜ぶのだから、それは事態のもつともよい解決であつただろう。……しかしまだ誰もそれを指導するものはいなかつた。私の提案は承認されたけれども、實行されなかつた。<sup>(9)</sup>」そしてこれも實行されなかつたジャマール・アッディーン・アルアフガーニーのムハンマド・アブドゥフに對するイスマール・イル暗殺提案についてもふれている。<sup>(10)</sup> この回想と彼らのこの段階での動き方とは事實一致すると見られる。したがつて農民出身將校グループの國民黨初期の敵對目標はヘディーヴにあつたと考えなければならない。外國の干渉に對する抵抗のラインは、イスマール・イル退位をめづつてしだいに明確化したとしても、それが決定的に表面化するのには、むしろ英・佛共同覺書を契機としてであつた。<sup>(11)</sup>

(ロ) 立憲主義者



ここでその諸要素や諸傾向に對して特に分析的に見ないでも、まず一般的にいえることは、彼らがヨーロッパ管理への對立とヘディーヴ專制への對立との間を動搖しているということである。しかし(イ)の場合との對比で顯著なことは、國民黨成立の段階では、むしろ外國管理への公然たる攻撃に力點がおかれたことであるといえる。それは祖國憲章が破産宣言への動きに對して強硬に抗議していることによつても明らかで、イスマーイールはこの意見を重要な據りどころとしたのである。<sup>(12)</sup> おそらく、このような態度は、祖國憲章を、さらには立憲化への動きをヘディーヴにとつて受けいれやすくさせる、あるいは受けいれざるをえなくさせる方便であつたであらう。

しかしこれはイースマールイスマールの退位によつて一舉に無効と歸した。このち、タウフイークの憲法拒否を通じて、立憲運動の積極的部分は英・佛の干渉との矛盾を運動にとり本質的なものとして把えるようになって行き、英・佛共同覺書がこのことを決定的にさせたのであつた。このような過程のものでこそ、立憲主義者一般が分解をひきおこすことになるのである。

#### (イ) イスラム改革派

一般的には、キリスト教ないし西歐の脅威に對する自覺がもつとも優越しているといえる。國民黨成立の時期のイギリス總領事ラッセルスの觀察においては、この傾向がもつとも刺戟的なものとして受けとられている。<sup>(13)</sup> ただこの場合も、(イ)でのべたアフガーニー提案のごとく、強烈な反ヘディーヴの立場も包含されていることを見落してはならない。

以上、(イ)の要素とそれぞれの目標とが、國民黨においてその結合點を見出したのであつた。それは、したがつて、外國の干渉反對・ヘディーヴ政治反對・イスマーイールイスマーイールついでタウフイーク反對が統一されたものといえるが、

反對要因はおのおの、さまざまの動機をはらんでおり、それらの混沌たる結合とみななければならない。つまりヘディヴのリヤード Riyat 内閣嫌惡も、ハリーム・パシャの陰謀も、同時に介在しうる餘地があるのである。

これまでのべたような結合の成立する基盤は何か。そこにどうしてもアフガーニーの組織ラインが活きていることを認めなければならない。さきにあげた主な参加メンバーの比較から、容易にアフガーニーの秘密組織が國民黨の母胎であることを類推できよう。しかも組織方針そのものが受繼がれたのである。アフガーニーの組織づくりは、傳統的政治社會と接續しつつ人民の新しい政治勢力を創り出すことを基本的特徴としている。その目標はイスラム改革と外からの脅威に對するそなえにあり、それらの緊迫度が高いと意識されればされる程、プラグマティックな態度が生じたのだと考えられる。アフガーニーがつぎのように煽動したり憤激したりすること、上述の組織形態とは必ずしも矛盾していないことを見抜かなければならない。

「悲慘な農民諸君、諸君は自分と身寄りたちとが生きて行くためのものをひき出すために大地の心臓を切裂くのに、何故、諸君を抑壓するものの心臓を切裂かないのか。何故、諸君の勞働の產物を食いつくしてしまうものの心臓を切裂かないのか。」<sup>(14)</sup>

「議員たちは、エジプトの現状を反映して、農民の收入を無慈悲に吸いとる名士であり、不正な支配者を拒否することをもつとも望まぬ臆病者であり、專制者の意志をほめたたえ、國の防衛と權力者への反對を不謹慎とみなす輩なのである。これらが不幸にも代表たちの性質である」<sup>(15)</sup>。

政治的權威はイスラムによつて正義に導かれるべきであり、また導かれうるといふ問題の立て方がそこにはあつた。このようなアフガーニー的組織原理に着目しないで、ただ陰謀分子が安全裝置として特權的諸層に工作の手をひろげ

るといふように見るのは正しくない。一八八一年一月、アブド・アルアールのオスマーン・リフキー 'Uthmān Rifki 暗殺の提案に反対して、オラービーが「死罪相當の」 muhlik 罷免要求請願をあえて提出することを主張し、その線<sup>(16)</sup>でまとめたのも、その背景にはこのような前提を見る必要がある。

アフガーニー的組織原理の問題とならんで、重要な問題點は、新しい政治勢力の登場の仕方であつた。すなわち、一八七〇年代後半、農村の新勢力の増強が名士會議にある程度反映されたのではないかと推定されるのである。その根據は議員の中のオムダ 'umdan (村長) の減少傾向である。一八六六年から七〇年代なかばまで名士會議を斷然おさえていたのはオムダであつた。一八六六年のそれでは、議員中カイロの三名・アレクサンドリアの二名を除くと、七〇名中五八名がオムダ層 'umad で、ミヌーフィーヤ、ブハイラ、アル・ギーザ、バヌー・スワイフ、アル・ファイユーム、アル・ミニヤ、バヌー・ムザールの各ムディーリーヤ Mudiriyyah は議員すべてがオムダによつて占められた。<sup>(17)</sup> 権力の末端は名士會議において従順なイエスマンとして機能したのである。<sup>(18)</sup> そしてオムダの比率ははじめ増加の傾向を示した。轉換は一八七六年からはじまり、一八八一〜一八八二年においてより顯著となつたのである。この微妙な變化が、名士會議におけるかつてなかつた批判的・自主的な發言の増加という變化と對應している。

農村での勢力變化の問題はC dでもふれる。それが部分的・間接的にせよ名士會議に反映されることは、より實質的・効果的な立憲化の要求を強めるとともに、たとえば農民出身將校が傳統的政治社會へのチャネルをもちうる條件をつくり出したと考えられるのである。そして二元管理下の危機がこのような狀況を促進した。

以上のべた二點が、秘密グループの構成において類似していたトルコの運動に對比して、獨特の展開を導き出した特殊な要因としてあげられる。

b 國民黨の運動原理

國民黨の機構についてはまったく不明である。オラービーら農民出身將校はこのことにまったくふれておらず、またマフムード・サーミー内閣の官房長アフマド・リファアト Ahmad Rifat やオラービーのもとでの陸軍次官ヤークーブ・サーミー Ya'qub Sami の調書、ムハンマド・アブドゥッフの調書および證言などからも具體的な材料はまったく引き出すことができない。

オラービーらの組織に關する沈黙は、自己防衛および關係者へ累を及ぼすのを極力回避しようとするこのあらわれかも知れない。彼らの證言ではむしろ結果的に彼らを裏切つた有力者たちの積極的な協力、そしてそれらが分擔すべき責任が強調されるのである。<sup>(21)</sup>その限りでも、彼らの證言の表面からだけ運動の原理を問題とすることの危険は明らかである。

しかし運動の展開の全過程から推理して、國民黨を一體的なかつ統合的な組織と見るよりは、諸（秘密）グループのルースな多面的な結合體として見るの方がはるかに妥當していると考えられる。各グループはそれぞれの組織原理をもっており、軍隊の蜂起のための連絡組織から有力者とそのとりまきのグループに至るさまざまな種類をもつ。そしてこれらのグループのいわばシャイフの連絡組織が政策決定にあたる。ただしグループピングは複雑にいりくみ、重なりあい、なおかつ多分に流動的であるために、このシャイフ連絡組織もその構成は決して固定化の傾向をとることなく、はなはだ自由で便宜的な性質のものであつたのではないか。しかも個々のグループあるいは單位は、それぞれ独自の利害とある場合には獨自の方針をもっており、個別のオートノミーが存在するので、全體はひとつの統

合體には決してなりえない。そこにもろもろの陰謀と背信の介入する餘地がある。運動は大體以上のようなシステムによつて支えられ、指導されたと判斷される。このような把握は、國民黨の夜の會合にオブザーヴァーとして出席していたサブンジー Louis Sabunji (シッア人、フランスの協力者) のメモワールによつて裏付けられるであらう。<sup>(22)</sup> 一八八二年二月成立したマフムード・サーミー・アルバールデーの内閣では、ヘディーヴも出席する内閣の會議 'Majlis al-Wuzarā' それ自體が一定の意味において前述のシャイフ連絡會議の性格を帶び、それが夜の會議によつて方向づけられることになり、それが國民黨の權力の中樞をなしていたと説明できる。しかしラーギブ・パシャの内閣、さらに行政會議 'Majlis al-Urfi' へと移行する過程で、かならずしも農民出身將校グループの直接的なイニシヤティヴが組織的に保障されない體制が生じたのは、このことが國民黨自體にとつても明確でなかつたことを示しているといえよう。<sup>(23)</sup>

以上の議論は、當然 Ba でのべた秘密結社の運動、さらには傳統的なスーフィー (神秘派) <sup>(24)</sup> *Mustafa Kamil* の同名の國民黨 *al-Hizb al-Watani* やサアド・ザグルール *Sa'd Zaghlūl* のワフド黨 *Hizb al-Wafdi* の運動原理を問題とすると、政治運動の傳統の面で以上の把握ははなはだ暗示的であると思われる。他方このような原理を活かしながらかまつた逆の強力な統合の原理に轉換したのが、ムスリム同胞團 *al-Ikhwān al-Muslimūn* であつた。<sup>(25)</sup>

なお、一八七九年後半にアレクサンドリアで設立された青年エジプト *Misr al-Farah* の組織およびその一部分がわかれて公然化した團體、イスラム善行協會 *Al-Jam'iyyah al-Khairiyah al-Islamiyah* は、<sup>(26)</sup> 一八八〇年に入つてからその動きを追跡することができなくなるが、おそらくこれらの組織の有効に生きのびた部分は國民黨の一構成部

分となつたのだと考えられる。アブド・アッラー・アンナディーム 'Abd Allāh al-Nadīm は國民黨の夜の會議の重要メンバーであつた。<sup>(27)</sup>

### c 大衆の不満の結集

大衆の不満を政治的に組織して行く上で、オラービー運動はいくつかの注目すべき動きを示した。一八八二年五月以降は特にこの點できわだつてゐる。マフムード・サーミー内閣の退陣を要求する英・佛の最後通牒とついで艦隊派遣とを契機として、大衆の要求をヘディーヴの退位、債務の廢棄、外國艦隊の撤退という方向へ誘導し、たかめて行つたのである。その適例は、アブド・アッラー・アンナディームによるアレクサンドリアの大衆集會であらう。<sup>(28)</sup> 一人が參加して二時間にわたるナディームの演説にききいつた。彼はコラーン、ハディース、近代の歴史を引きながら、英佛最後通牒を攻撃し、これに反對すべきことを訴え、またヘディーヴが支配者として不適格であると説いた。その効果は、六月はじめコンスタンティノープルからダルウィーシュ・パシャ Darwish Pasha が使節として到着したとき、アレクサンドリアの街を埋めた聲が「覺書(最後通牒)、反對! 反對!」Al-ta'īyah, marfū'ah, marfū'ah<sup>(29)</sup>であつたこと、流行歌のくりかえしの部分は「タウフィークよ、蟻の顔をしたものよ、誰がそんなことをしろと言つたのか」Yā Tawfiq yā wajh al-namlā, Man kallak tī'amīl hadhā'l-amlā? とつた<sup>(30)</sup>ことによつて知られる。

大衆への働きかけは、イスラム意識の強調の方向でなされた。しかし煽動や宣傳の基調は一方的にファナティックな宗教感情を刺戟することよりは、はるかに啓蒙主義的であつた。<sup>(31)</sup> サリーフ・マグディー Salih Majdi の詩やフサ<sup>(32)</sup>

イン・アルマルサーフィー Husain al-Marsafi の「八語評論」<sup>(33)</sup> Risalah al-Kalim al-Thaman などの影響力

は特にそのようなものであつた。ムハンマド・アブドゥフも、そしてオラービーも、マルサーフィー的な方向とイスラムの高揚の方向とを結合させるところで大衆の啓蒙を考えていたといつてよからう。<sup>(34)</sup>

それにもかかわらず工作をうけとるがわは、特にそれが大衆的行動に組織されて行く場合には、傳統的な意識の反應が著しかつた。トルコ使節ダルウィーシュ・パシャがオラービーを支持するアル・アズハル大學のオラマーの集會を解散させたのに對する抗議運動は、その一例である。<sup>(35)</sup>その晩、地方にオルガナイザーが送り出され、カイロでは小集會が絶えず、翌朝アル・アズハルの學生を主力とする四〇〇〇名の大集會が開かれる。このような反應の速度と激しさが、オラマーの一齊の強烈な煽動ときり離して考えられないことはいうまでもない。

大衆の不満の爆發形態としてもつとも特徴的なのは、一八八二年六月一日のアレクサンドリア暴動である。街頭での口争いが全市の争亂に發展して行く過程で、意識的な挑發分子の活動があつたとしても、自然發生的なクセノフ・オビアの發散という面がいちじるしく大きかつたとしなければならぬ。<sup>(36)</sup>しかもそれははじめにのべたナディームらの宣傳によるかなり高次の政治的要求が滲透した基盤の上で、その具體的な表現として發生したのであつた。アレクサンドリア暴動は、大衆行動の性格と傾向とを集中的にあらわしていたといえるであらう。そしてオラービー運動を攻撃するがわは、最大限にこの點を利用し干渉の口實をつくり出したのである。

ベドウィンの動向も注意されなければならない。ベドウィンはオラービー運動にとつてはまったく負の要因であつたと結論できるであらう。それはつねに買収の對象であつた。タウフィークはベドウィンをカイロの街頭にひきいれて混亂をひき起す陰謀をおこなつたし、<sup>(37)</sup>タル・アルカビール<sup>(38)</sup>の決戦の場合をはじめイギリス侵入軍にとつてその効用

ははなはだ大きかった。

d 軍隊組織の意義

B cで問題としたような大衆の動向に對して、もつとも組織的な大衆の反抗を保證しえた唯一の場は軍隊であつた。この觀點からオラビー運動は整理される必要がある。農民出身將校グループの活動の形式、たとえばオラビーが陸軍大臣としての立場で指導權をにぎることの意義、つぎに彼らの軍隊増員要求が意味するもの、またタル・アルカビールの敗北後、彼らが砂漠への逃亡や分散抵抗など傳統的な反抗繼續方法をとらず直ちに政治的降伏にふみきつたことの意味するもの、これらの問題は、右の觀點から見直すとそれぞれ氣付かれなかつた重要な側面を露呈することになる。

軍隊組織がそのような大衆の組織的反抗の據點として發展した経路は、二・一八事件、二・一事件、九・九事件という三つの劃期を比較することによつてかなり明らかとなる。二・一八事件の参加者は軍學校の生徒および將校で、兵士の役割は認められない。二・一事件では部隊としての行動はおこされるけれども、目標は上官の救出におかれてゐる。それが九・九事件となると、公然たるヘディーヴへの反逆であり、純然たる軍事行動・作戰である。つまり軍隊が一體として革命的行動をおこすその組織性・積極性がいちじるしく増大して行くのであり、参加兵士の役割が重大になつてくるのである。

このような兵士の動向がいかにして現實化したか。まずさし當つて、農民出身將校グループと兵士との間の交流・結びつき、あるいは前者の後者に對する工作をどのように見たらよいのか、という問題がある。兵士たちの意識から



すれば、アフマド・オラービー、アリー・ファフミー、アブド・アルアール、トルバ・イスマト 'Tulbah Ismat'らはいわば農村シャイフにあたり、そこに共同體的な結合感を抱くのは、當然ありうることである。そのような土臺の上で、一八八〇年オラービーがタウフィーキーヤ運河の建設への兵士の勞役徵發に應じることを拒否した事件<sup>(38)</sup>などが兵士大衆にいかなる影響を與えたかを考えてみる必要がある。オラービーら農民出身將校中の要注意人物に對する陰謀としてたびたび計畫された街頭での喧嘩の挑發から、彼らを救つたのがその部隊の兵士たちであつた<sup>(39)</sup>というオラービーの記述も、ここで検討されるべき材料である。

オラービーらが農村に使者を派遣して、農民を高利貸への負債から解放することを宣傳させたとき<sup>(40)</sup>、その使者は彼らの兵士たちであつたと考えるのは、もつとも自然であろう<sup>(41)</sup>。この意味で、農民出身將校グループにとつて兵士への工作があらゆる大衆の組織化への前提だつたのであり、軍隊の一體性こそ組織的な大衆の反抗の基礎であつたとみることが出来る。そしてこのことが、國民黨の中で、あるいはオラービー運動全般の中で、農民出身將校グループの活動の革命性を保證しているのである。

しかし實際には、軍隊が一體として行動できる條件はなかつた。それはチュルケス人將校の陰謀事件や對英戦争下の分裂・裏切り<sup>(42)</sup>によつて明らかである。それにもかかわらず、オラービーらはこの一體性にすべてを賭けたのであつて、その劇的な破滅がタル・アルカビールであつた。

1 以下の紹介は Muhammad Sabry : *Episode de la question d'Afrique, l'empire égyptien sous Ismail et l'ingérence anglo-française* (1863-1879), 1933. 2-49° Muhammad 'Abduh 自身のフリーメイソンリに關する証言は W. S. Blunt : *op. cit.* Appendix I にある。

- 2 J. M. Landau : *Parliaments and Parties in Egypt*, 1954, pp. 76~77.
  - 3 時にフリー・ソフナーの参加の時期について W. S. Blunt : op. cit. Appendix I, Arabi's Account on his life and the Events, p. 483.
  - 4 A. Bloyès : *Français et anglais en Égypte*, Chap. II et III. Landau : op. cit. pp. 77~80.
  - 5 'Abd al-Raḥmān al-Rāfi' : 'Asr Isma'īl, 1948, vol. II. pp. 180~182. に推定参加者名がある°
  - 6 Ibid., pp. 182~184.
  - 7 Landau : op. cit. p. 89. Al-Rāfi' の計算とちがって°
  - 8 Blunt : op. cit. pp. 133~135. フランケンブルグの連絡にあたつたものとつづきフリー・アッルービー 'Ali al-Rubī の名をあげてゐる°
  - 9 Blunt : op. cit. p. 483.
  - 10 M. 'Abduh 著、松岡正剛訳° Blunt : op. cit. p. 489.
  - 11 Blunt : op. cit. p. 189.
  - 12 Cromer : op. cit. p. 64~80.
  - 13 初期の運動の高揚に關するイギリス總領事ラッセルス Frank Lascelles の本國あて報告はつぎのようである。また國民黨成立の段階の動きである。
- 「現在ここでは相當の煽動がおこなわれている。シャイフ・アルバクリーは名士およびオラマーの諸集會をひらき、ヨーロッパ人の内閣に對する宗教的な激しい憎惡を煽ろうとし、リヤード・パシヤはモスクでキリスト教徒の友として非難されている。警視總監から生命の危險を警告されているリヤード・パシヤは辭職におい込まれるおそれがある。」Cromer : op. cit. p. 77.
- 14 Ahmad Shafiq : *Mudhakirātū fi Nisf Qarn*, 1934~1936, p. 109. (Nadav Safran : *Egypt in search of Political Community* に所引)

- 15 Ibid. (Nuseibeh : The Ideas of Arab Nationalism, に所引)
- 16 Blunt : op. cit. p. 485.
- 17 'Abd al-Raḥmān al-Rāfi' : 'Asr Ismā'īl, vol. II, pp. 82~84, 149~151.
- 18 Nadav Safran : op. cit. p. 270, n. 20. フォンド・シャフィークが父からきいた逸話(名士會議のはじめ、議席を左・右・中間に分けようとしたとき、全員が右へ走った)は興味をかい。
- 19 Landau : op. cit. p. 39. 一八八一~八二年の議員については、'Abd al-Raḥmān al-Rāfi' : Al-thawrah al-'urābiyah wa-l-iḥtiāl al-injizī, 1949, pp. 173~175.
- 20 Broadley : op. cit. pp. 203~237. Blunt : op. cit. pp. 489~497.  
たとえは Muhammad 'Abduh のことだ。
- 21 「私の愛國心とスルターン・パシヤ Sultan Basha のそれとは同一で、われわれは一人の人間のごとく行動し、考えた。スルターン・パシヤは「サー」・スルターン・パシヤとなり、加うるに一萬ポンドの贈物を受けた。故にわれわれの行爲は、ひとしく稱讃されるに値する。それならば何故、私は愛國心のために裁判を待つて牢獄におり、スルターン・パシヤはイギリスのナイトになつて一萬ポンドを受けるのか。」 Broadley : op. cit. p. 229.
- 22 Blunt : op. cit. pp. 326~346. & pp. 544~556.
- 23 行政會議メンザーには農民出身將校は直接入つてゐた。 Broadley : op. cit. pp. 505~507.
- 24 O. Depont et X. Coppolani : Les confréries religieuses musulmanes, 1958.
- 25 板垣雄三「アラブ民族主義とイスラム」上(『思想』一九六一年一號)
- 26 Landau : op. cit. pp. 101~103.
- 27 註(23)のサマンジー参照。
- 28 Blunt : op. cit. pp. 328~9.

エジプト軍隊の階級と給料 (qursh)

	1881年4月		1877年	假 譯
	以前	以後		
nafar	,19	,30	,20	兵 士
awnbāshi	,30	,40	,30	伍 長
shāwish	,30	,55	,40	軍 曹
bulūk amin	,40	,65	,50	補給下士官
bashjāwish	,50	,80	,60	曹 長
şul	1,30	2,50	1,20	下級副官
—	—	—	2,20	旗 手 Spiran
mulāzim thānin	3,50	6,00	3,00	少 尉
mulāzim awwal	4,00	7,50	3,50	中 尉
yūz bāshi	5,00	9,50	5,00	大 尉
qa'ul āghāsī	12,00	15,00	12,00	高級副官
bikbāshi	20,00	25,00	20,00	少 佐
qāymaqām	25,00	35,00	30,00	中 佐
amir alāy	40,00	50,00	40,00	大 佐
mir liwā	60,00	65,00	60,00	少 將
fariq	75,00	80,00	75,00	大 將

枠で囲んだ部分：‘Abd al-Raḥmān al-Rāfi‘i, *Al-thawrah al-‘urābiyah wa-l-iḥtilāl injlīzī*, p. 103. による。1877年の部分：J. C. McCoan, *Egypt as it is*, p. 383, Appendix D. による。

1881年4月以前と1877年との不一致は補正できないので、そのまま併記した。

なお Pay に関しては、特に下級のものはあくまで名目であることは明らかである。むしろ徴税の一項目とみなすべきである。その證據は、

Commission Supérieure d'Enquête : *Rapport Préliminaire*, 1878, p.34~36

- 29 Ibid. p. 306.
- 30 Broadley : op. cit. p. 503. ハント・リントン Ahmad Rifa'i の語録に於て。
- 31 Broadley : op. cit. pp. 230~233., pp. 440~450 (Arabi's Memorandum on Egyptian Reform)
- 32 J. M. Ahmad : The Intellectual Origins of Egyptian Nationalism, pp. 17~8. 參照。
- 33 J. M. Ahmad, pp. 21~23, 「自由」「民族」「正義」「尊嚴」「政治」「政府」等。
- 34 註(31)參照
- 35 Blunt : op. cit. p. 307, 330.
- 36 N. Scotidis : L'Égypte contemporaine et Arabi Pacha, 1888, pp. 85~128. Blunt : op. cit. pp. 497~534, Edward Malet, Egypt, 1879~1883, 1909, pp. 431~437. Edmond Plauchut : L'Égypte et l'occupation anglaise, 1889, pp. 74~86.
- 37 Scotidis : Ibid. p. 77~78.
- 38 Blunt : op. cit. p. 484.
- 39 Ibid.
- 40 M. Wallace : Egypt and Egyptian Question. p. 397. Scotidis op. cit. Chap. V.
- 41 兵士徴集のシステムからしても、村では家族の兵士たちの動きに敏感であつたはずである。シャイフを通じての割当て徴集、兵士逃亡の場合の家族への罰則、村の連帯責任など。Commission supérieure d'enquête : Rapport Préliminaire, 1878, p. 34~36.
- 42 Mudhakkirāt 'Urābī, vol. II, 13. Charles Royle : The Egyptian Campaigns, 1886, pp. 312~330.

## C 運動の思想的側面

### a エジプトの獨立

國民黨の綱領的な表明としては、(イ)一八七九年のプログラム。「エジプト國民黨宣言」 *Manshurāt al-Hizb al-Watani al-Misri, Manifeste du parti national égyptien* の題のもとに一八七九年二月四日アラビア語で起草された。このとき立ちあつたオラービー運動同情者のスイス人、ジョン・ニネット John Ninet がのちに翻譯し、これが基本的テキストとなつている。<sup>(1)</sup> 原テキストの執筆者は不明であるが、作製協力者の中にはマフムード・サーミ・アルバールデー Mahmūd Sami al-Bārūdī スルターン・パシャ Sultān Bashā シヤリーフ・パシャ Sharif Bashā オマル・ルトフィー・パシャ Umar Lutfī らがあつたといふ。<sup>(2)</sup> (ロ)一八八一年のプログラム。「エジプト國民黨綱領」 *Barnāmaj al-Hizb al-Watani ai-Misri, Programme of the National Party of Egypt* として一八八一年二月中二〇日までの間にブラント W. S. Blunt が將校およびオラマーの意見を整理・執筆し、ムハンマド・アブドゥフ Muḥammad ‘Abduḥ’ スライマーン・アバーザ Sulaimān Abāza’ マフムード・サーミ・アルバールデーの校訂を経たもの。<sup>(4)</sup> 以上、ふたつのプログラムがある。<sup>(5)</sup>

おのおのの要點を示せば、つぎの通りである。

(イ) 國民黨の存在、およびエジプトを破産から救う希望の表明、すべてのエジプト人の自由の權利、教育改革の重要性の指摘。外國に従えられたヘディーヴではなく國民黨こそ、エジプトを負債から解放する義務をはたす。エジプ

ト内政への外國人官吏の干涉にたいする非難、外國の影響はただ助言的なものに限られるべきである。黨はヨーロッパの善意を信じ、もし外交官による保護が保證されるなら、宣言起草者は公然化してもよい。負債は支拂われる。ただしかなるエジプト人の財産も抵當とされるべきではない。財政上の四つの目標は、世襲のものを除きヘディーヴ領地の國庫への返還・鐵道の全收入のエジプトへの返還・エジプトの負債の四分利子にもとづく統合整理・債務監督のための暫定三人委員會の設置。

(四) (i) オスマン帝國が存続する限り、スルタンの權威を尊重する、ただしエジプトを單なるトルコのパシャリクにおとしめようとする企てには斷然反對する。(ii) ヘディーヴ・タウフィークの君臨が適法であり、一八八一年九月の約束が維持される限り、ヘディーヴ・タウフィークへの忠誠にかわりがない。(iii) エジプトの財政上の契約、負債を承認する。強壓的にでなくもちこまれる改善や節約ならば、外國のエジプト財政管理のもとでもそれを認める。(vi) 軍隊を一万八〇〇〇名まで増員すべきである。獨裁的な傾向をもつ階級が支配する國でもつとも必要な保護。(v) 國民黨は政治團體で宗教團體ではない。主としてムスリムであるが、コプトやユダヤ教徒の支持もえている。すべての人が政治的に、かつ法の前で、平等であることを信じる。(vi) エジプト自身の努力により、法と教育と政治的自由の尊重により知的にも道德的にも國を更生させる。

(イ) は主としてエジプト人に向つてのべられたものであるのに對し、(ロ) はヨーロッパの世論を考慮したものである。<sup>(6)</sup> しかも運動の發展において、ふたつはまったく異つた段階でつくり出されたものである。運動の直面していた狀況やそこでもちえた展望がいちじるしく異なつていたにもかかわらず、エジプトの自主的立場・獨立の問題に關して、重要な一致が見出される。すなわち、外債償却への責任と國の内側から改革の必要についての表明である。(イ) と(ロ) との

間で、その作製にあつて目的や對象の相違がそれほど大きなファクターとして作用していないとすれば、(iv)の(v)や(v)はむしろ問題の具體化とみることもできる。(iv)の(i)・(ii)については、一八八二年一月の英・佛共同覺書さらに五月の最後通牒を経た段階での、つぎのような文書も参照されるべきであろう。これはアレクサンドリアを代表する住民のオラービーに對する建白である。<sup>(7)</sup>

「寛大にして慈悲深き神の名において……。われらは、わが町のかなたに存在する艦隊が、イギリスおよびフランスの二人の總領事によりエジプト政府に提出された覺書を實行するまさにその目的のためにあることを信じている。

この覺書にもられた要求は、人民とその國の權利に打撃を與え、スルタンの勅令を無効にし、純然たる内政問題に公然明白なる干渉を加えようとするものである。それはまたエジプト人の追放とわが大臣たる人々の解職を要求している。これはわが國を領有しようとする以外に何を意味しえよう。われらはヘディーヴ殿下が無條件に問題の覺書を受諾したとき。彼はエジプトがトルコ宮廷の宗主權のもとにあるにもかかわらずこれをなしたのである。……覺書への服従はただちにわれらの權利とトルコ宮廷の權利とを破壊する。われらアレクサンドリアの住民は覺書を拒否する。それを受諾したものは、絶對的にかつ今後永久にわれらの立場と斷絶せるものである。

われらはトルコ宮廷から離れていかなる外國に従うことにも反對する。たといわれらそのために死ななくとも、國死んで生きながらえんはより、國の生命のために死すことを選ぶ。」

これがあくまでも一八八二年五月末の條件下での主張であることに注意するとしても、ここでも「獨立」の扱われ方は前述のプログラムの立場に一貫してつながるのである。



オラービー自身も、エジプト財政の二元管理の有効性を認め、國家財政の破綻が解決されるまでこれを保持することとを言明し、またスルタンやヘディーヴにはムスリムの君主であることを要求しつつ忠誠を誓うのである<sup>(8)</sup>。しかし彼は、ヘディーヴ・イスマールールの退位が國內の運動によつてではなく外國の干涉によつてもたらされたことは、エジプトの解放と共和制への轉換のチャンス<sup>(9)</sup>を逸したことを意味し、「われわれは自分自身のためでなく子孫のために働いているのだ」と考えるのである<sup>(10)</sup>。つまり、エジプトの獨立は長期間の幾段階もの運動を前提として考えられており、二元管理・ヘディーヴ體制など現實の條件に對してはなほだ慎重であつた。この點で、外國の干涉の條件を十分考慮できなかったというムハンマド・アブドゥフのオラービー評價は、必ずしも正當とは考えられない<sup>(11)</sup>。

以上、オラービー運動における自主權獲得・獨立の問題での漸進主義的な態度を検討してきたが、これはヨーロッパがわで宣傳された“fanatists”のイメージをまったく裏切るものである。そこではむしろ、イギリスの征服に對する樂觀主義が認められる。それはブランドやレセプス F. de Lesseps への期待と結びついていた。

つぎに、オラービー運動におけるエジプト人意識を問題とする。

農民出身將校の場合、かれらの意識を規定したのは軍隊内部での體驗、特にトルコ人・チェルケス人將校の壓迫であつたことは明らかである。つまりエティオピア戰爭の經驗や待遇の極端な不公平に對する不滿によつて生じた結果が、エジプト人のグループとして自覺したのである。オラービーの場合には、さらにローリング William Wing Loring との對決事件が注意される。勤務中の兵士の禮拜に干涉したアメリカ南軍出身のこの檢閲官との對立は、オラービーの意識に對して重大な暗示となつたはずである。以上のようなエジプト人意識に對しては、たとえばシャリアフ・パシャはほとんど無縁であらう。國民黨と關係をもつたものにとつて、國民黨 Al-Hizb al-Watani のワタ

ン(祖國)が意味したところは決して一樣ではなかった。その中で、結集の軸としてもつともエジプト人意識に固執したのは、農民出身將校グループであつたといえる。

エジプト人がムスリム・エジプト人として考えられていないことは、さきの(四)(五)によつても示されるが、コプトやユダヤ教徒の運動参加に對する評價を單にヨーロッパ人向けの宣傳としてのみ見るのは正しくないであろう。オラービー、アリー・ファフミー、アル・アールと共に裁判にかけられた指導的中核でも、人種・出身別には多くの要素を含んでいる。オラービーがマフムード・サーミー・アルバールデーはチェルケス人だがエジプトに住みついて六〇〇年になる一族の出身だ、という指摘を特におこなっているのは興味ふかい。オラービー運動におけるエジプト人意識は、それ自体アラブ意識に發展する内的條件をはらんでいたとすべきであろう。この點はA b Ⅱ(ハ)および(ト)とも關係する。なおアル・マルサーフィー Husain al-Marsāfi の「八語評論」Risāla haḥ-Kalim al-Thamān で提出された古代工業の復興、エジプトはみずからの工業をもつべきであるという議論とふれあう主張は、オラービー運動の中から發見できない。一八八一年にアル・マルサーフィーの着想の中にあり、そのちタラアト・ハルブ [Talāt Harb] の實踐を支えることになるブルジョア的發展の思想にとつて、しかしオラービー運動のエジプト人意識はその母胎であつたと考えられる。

## b 立憲主義

ムハンマド・アリー王朝の専制にたいする抵抗は、一八〇九年オマル・マクラム Umar Makram においてはパシャを選出したシャイフによるシューラ<sup>(16)</sup>(協議・審議) shura の原則にたつておこなわれたが、一八七九年〜一八八二

年においては、憲法 *al-Lā'ihah Asāsiyah* と議會 *Majlis Shurā'i-Nuwwāb* として責任内閣の要求という形をとつた。

國民黨の主張を、つぎの三文書を通じて検討しよう。(i)祖國憲章 *al-Lā'ihah al-Wataniyah* (一八七九年四月)、(ii)一八七九年一月のプログラム、(iii)一八八一年二月のプログラム。ここでの(i)(ii)はCaでの(i)(ii)にあたり、要約はそこで示されている。

(i) この要點は(i)リヴァース・ウィルソン *Rivers Wilson* の計畫する破産宣言に反對する。エジプトの國家收入はその經常費と義務履行のための支出とに對して十分である。(ii)議會制度をヨーロッパ流に改革し、ヘディーヴの手から離れた議會にのみ責任をおう内閣 *Majlis al-Wuzarā'* 制度を確立する。以上、二點である。これはヨーロッパ内閣が倒れたあと、特に(i)によつてヘディーヴを支援しながら、その取引きで(ii)を認めさせ、一八六六年以來の「代議機關」をつくりかえて實質的な立憲制へ移行しようとする意圖をもつたものである。

(ii)は(i)の動きにもとづいて作製された一八七九年の憲法草案がタウフィークによつて拒否されたあとで、主要な關心が二元管理の立て直し・完成への抵抗に向けられていて、立憲運動の面では抽象的に自由の權利が強調されているにすぎない。

(iii)は九・九事件でのヘディーヴの憲法の約束を強調しており、そのことが國民黨にとつて忠誠を誓うべきヘディーヴの條件であるとしている。

(i)と(ii)とを比較する場合、文言の上での類似、要求の基本内容の共通性にもかかわらず、要求の壓力の上では格段の、單純な比較を許さぬような發展がその間にあるのである。そのような立憲運動の強化の過程で、つくり出されて

くる草案は、どのような發展を示すであらうか。

つぎの三つを内容的に比較検討することが必要である。この場合、さらに一八六六年のいわゆる《Réglement》、すなわち *Lā'ihah asāsīyah* <sup>(18)</sup> またオスマン帝國のいわゆるミトハト憲法(一八七六年) *Kanun-i Esasi* <sup>(19)</sup> も参照されなければならない。三つとは、(一)一八七九年五月一七日名士會議に提出された憲法(基本憲章) *Lā'ihah asāsīyah* <sup>(20)</sup> 草案、(二)一八八一年一月二日名士會議に示されたシャリーフ・パシヤのプラン、<sup>(21)</sup> (三)一八八二年二月七日發布された憲法 *Lā'ihah asāsīyah* <sup>(22)</sup> およびこれに附隨して三月發布された選舉法 *Qanun al-Intikhab* <sup>(24)</sup> である。

(二) 四九條よりなり、一八六六年の法令を土臺として修正したものといえる。新しい點の要旨は、

⑨ 議員はその意見をのべる完全な自由を有する。

⑪ 議會と内閣との係争問題の最終決定は前者による。

⑭ 議會の會議の公開とする。

⑮ 開會にあたり全議員はヘディーヴとワタン(祖国)とへの忠誠を宣誓する。

⑲ エジプト人はすべて任意の議員を通じて議會に請願を提出する權利を有する。

⑳—㉔ 開會にあたり内閣はあらゆる法令および決定を議會に提出して審議をうけなければならない。議會が廢止した法律は、同じ會期中にこれを再提出することはできない。

㉔ 審議にあつてはアラビア語を公用語とする。

㉔ スーダーンも議員を送ることが許される。

③⑥ ④③ ④④ 内閣はそのすべての決定と措置とについて議會に責任をおう mas'ulin。

④⑤ ④⑥ 議會は財政を監督する。

これらのうち明らかにミトハト憲法に對應するのはつぎのとおりである（「」はカヌーニ・エサスイの条項）。⑨—〔47〕、⑮—〔46〕、⑲—〔52〕、⑳—〔28〕—〔53〕〔54〕、㉑—〔57〕 これから推してこのラーイハ・アサースィヤ案の成立にはカヌーニ・エサスイが多大の影響を及ぼしているといつてよからう。ただしカヌーニ・エサスイがベルギー憲法を模して基本法としての體裁をととのえているのに對し、ラーイハは議會の權能・機能に集中している。そして重要な相違は、ラーイハの方が議會の權能にやや強い規定をおいていることである。

以上のことから、一八七九年のついに葬り去られた憲法草案の特徴はつぎのようにまとめられる。一八六六年のラーイハの上に一八七六年のトルコのカヌーニを接木した。このような仕事はトルコ立憲運動と親密な關係にあつたシャリーフ・パシャらによつておこなわれたが、彼らの立場と一八七九年二・一八事件後の情勢とは、議會の權限に關してカヌーニよりは一步を進めさせた。

(※) 四七條よりなり、一八七九年の草案を修正したものである。主な修正點はつぎのとおりである。

② 議員は四年ごとに選舉される。

⑬ 議長は議員の中から内閣の助言にしたがつてヘディーズが指名する。

⑮ ⑱ 閣僚は、全體としても個別にも、議會に對し責任をおう。

㉑ いかなる税も議會の承認をえないで課せられることはない。

一八八二年一月のシャリーフ・パシャのプランは、一八七九年の草案をより整えたものであるが、財政管理權の問

題では大きく後退した。それはトルコ宮廷からの壓迫を受けた反面、名士會議での重大修正要求に直面せざるをえなかつた。おもな修正點はつぎの通りである。

(i) 任期を五年とする。

(ii) 三カ月で審議を終えられない場合は、會期は一五〇日延長される。

(iii) 議員が逮捕される場合、議會は會期終了までそれを延期させることができる。

(iv) ヘディーヴは議會の提案する三名の議員の中から議長を指名する。議長の任期は五年。

(v) 大臣は質問がおこなわれた場合には、みずからか、あるいは代理をもつて議會に答辨しなければならない。

(vi) 内閣の責任制は、内閣の決定と同時に個々の大臣の行動にも適用される。

(vii) 議會は法律の發議に参加する權利をもつ。

(viii) 議會は修正權をもち、提案された法律のおおの條項について賛成し、また拒否できる。

(ix) 豫算は議會で審議され、それを通過するまでは發効しない。

(x) 政府が結んだいかなる條約・契約も、議會の批准をうるまでは有効でない。

(h) 五三條よりなり、立憲運動のはじめでの實りある達成である。(h)とその修正要求とをもとにして成立した。ただし修正要求點中、(ix)と(x)とは非常に大きな問題で、このためにシャリーフ内閣は辭職したのであり、マフムード・サーミール内閣に對する英・佛最後通牒もこの問題をめぐる紛争に起因したのであつた。結局は(x)はいれられず、(ix)はつぎの形でとりいれられた。

③4 つぎのものは決して議會の審議の對象となりえない。トルコ宮廷への貢納、公債のサーヴィス、債務に關するす

すべての事項、清算法あるいは外國とエジプト政府との間に存在する條約から結果するすべての事項。

③ 豫算は議會に送られ、そこで審議される。(前條の留保條件のもとで)。

この憲法はヘディーウの法令として發布されたが、副署しているのはマフムード・サーミー、ムスタファ・ファフミー Mustafa Fahmī、アフマド・オラービー、アリー・サディーク 'Alī Ṣadiq、マフムード・ファフミー Mahmūd Fahmī、アブド・アッラー・フィクリー 'Abd Allāh Fikrī、ハサン・アッシュライイー Hasan al-Shurayī 作製を擔當したのはシュライイーおよびフィクリーであつた。<sup>(26)</sup>

(二)に對する(イ)は、(イ)に對する(イ)と對應する。そのような展開の中で、シャリーフ・パシャは脱落し、シュライイーは發展した。オラービー一派と立憲主義者というような要素の立て方は適當でない。むしろオラービー運動の欠くことのできない一側面として立憲運動をとりあげ、これに即して立憲主義者の發展を問題とすべきであらう。立憲主義をシャリーフ・パシャらのラインで固定し、一定の段階でオラービー運動と對立する要素ときめてしまうのは、はなはだ一面的な見方である。この場合、たとえばオラービーが本來立憲主義者として出發したのではないことは問題ではない。<sup>(27)</sup>軍隊の運動の發展の中で、それ自體の要求として、憲法の要求がでてきたことが問題なのである。

つぎの文書は一八八二年五月末、英・佛のサーミー内閣辭職を要求する最後通牒に反對してオラービー宛よせられたシャルキヤ住民の建白書である。立憲運動としてのオラービー運動に對する自然な共感の表明を見ることができよう。

「議會の承認をえて成立し、マフムード・サーミー・パシャのもとにある内閣は、政權をえたその日から、國の狀態を改善し、正義の諸原則を主張し、條理にもとづく規則を支持し、内閣成立前の欠陥を拭い去る努力をおこなつ

てきた。

それは、國を破滅させその美を傷つけたかの専制を根絶するため、もつとも効果ある措置をとつた。あらん限りの熱情と知恵を發揮して、それは正義を求めるものに正義を興えはじめた。それ故、われらシャルキーヤのシャイフらは、この内閣の維持をつよく求める。そのよき事業を完成するために。その事業は、神のおぼしめしなら、われらの利益と繁榮である。われらは自らの名譽、財産、すべてわれらの寶を守るごとく、内閣を支持することを誓う。<sup>(28)</sup>

立憲主義に關連して、一般に自由主義のうけいられ方はどうであつたか。

オラービーの場合についていえば、ナポレオンの傳記を通じて知つたフランス革命への關心がまず注意されなければならぬ。<sup>(29)</sup> ついで彼に大きな影響を與えたのはW・S・ブランドの助言であつた。課税は土地に對してなされるのであり、人身に對してなされるのではないという原則の理解などは、おそらくこのルートを通じてであつたと考えられる。アブド・アッラー・アンナディーム 'Abd Allah al-Nadīm' アディーブ・イスハーク Adib Ishāq' ヤアクブ・サンヌーア Ya'qūb Sannū' らのジャーナリストの活動も非常に重要な要素であつたろう。<sup>(30)</sup>

しかし一般的にいつて、マルサーフィーの啓蒙パンフレットが影響を與え、自由なくしてワタン（祖國）なしと觀念されたとしても、それは決していわば西ヨーロッパ的觀念の無媒介の受容とそれへの適應ではなかつたはずである。この問題は、つぎのcの問題である。

# c イスラム改革



オラービー運動におけるオラマの役割がここでのテーマとなる。この問題の一部はすでにA d I (、B a・cで扱った。そこでは、オラマが大衆の意識の方向を決定する上でいかに積極的であつたか、運動の連帯の展望をいかにして導き出してくるか、などの問題が扱われた。事實、大衆のオラービー運動支持は、「オラービーよ、神汝に勝利を授け給わんことを」 Allah yansuwak ya 'Urabi という表現で示されたのであり、モスクこそ日常的な政治的宣傳の場であつたと考えられよう<sup>(32)</sup>。

ここでは、そのような役割をになうオラマの思想動向を検討することにする。

オラービー運動の發展のもとでおきたシャイフ・アルイスラーム Shaykh al-Islam の交替事件は、オラマの間の深刻な動搖を反映している。一八八一年二月五日アル・アズハル大學においてはシャイフ・アルイスラーム、ムハンマド・アルアッバーシー Muhammad al-'Abbāsi をやめさせ、かわりにアル・インバーバ al-Imbābah を選んだ。しかしこの場合も反對が多く、のちオラービー運動敗北後捕えられて獄死したアル・アライシュ al-Alaysh の支持が大きかつた。ブランドは、この事件の背景としてハナフィーに對するシャーフイーおよびマリーキーの運動があることを指摘しているが、この事件の直接の原因はアル・アッバーシーの國民黨に對する敵視、タウフィークに立憲政治を拒否するファトワー fatwa を與える危険であつたことが見落されてはならない。このようなオラマの政治意識は、B cでとりあげたダルウィーシュ抗議集會へと高まつて行くのである。急速に危機が深まる段階でオラマの壓倒的部分が強くオラービー支持の雰囲気の中にあつたことについては、サブンジー Sabunji の證言<sup>(34)</sup>をはじめ、多くの證據がある。

オラマの意識のこの尖鋭化を導いたのは、ジャマール・アッディーン・アルアフガーニー Jamāl al-Dīn al-

Afghani ともハンマド・アブドゥッ Muhammad 'Abduh を中心とする活動であつたことは、しばしば指摘される通りである。しかしそれと同時に、ないしはさらにその基底にあるものとして、一九世紀のアル・アズハル大學の變化に注目しなければならない。ハサン・ビン・ムハンマド・アルアッタル Hasan b. Muhammad al-'Atfar がナポレオン・ボナパルトの政治を目標したことによつて觸發された活動は、アル・アズハル大學においてすでに一定の知的傳統を形成していた。<sup>(35)</sup>傳統と革新の問題において、それはイスマールイールの「東洋のベルギー」のヴィジョンとはまったく異なつたラインの思想的態度を堅持したのである。アフガーニーの「内には改革、外には防衛」<sup>(36)</sup>の訴えが緊張した危機感をもつて語りかけられたとき、オラマーの主要部分が反應しえた基盤の存在を認めなければならぬ。この意味で、オラービー運動はその一部分にオラマーの「大衆」運動をもつことになるのである。

#### d 人民の立場

オラービー運動が含んでいる人民主義的な側面は、多分にアフマド・オラービー自身のパーソナリティに象徴されていたように思われる。彼は大衆の中で「唯一無比の人」*al-'wâhid* と呼ばれた。「典型的な農民」<sup>(37)</sup>、背が高く、手足が大きく、動作がやや遅くて、彼はまさにナイル下流の勤勉な農民に特徴的なあの堂々とした體力を象徴化しているようであつた。<sup>(38)</sup>一八八一年の九・九事件におけるヘディーヴと彼との應對は、彼の思想や行動における人民的立場をもつとも鮮明に示したものだといえるであろう。<sup>(39)</sup>

タウフィーク 「余はこの國のヘディーヴであり、余自身の欲する通りふるまう。」

オラービー 「われわれは奴隸ではない。そして奴隸であることを、今日からのち子孫に傳えたりはしない。」

このようなパーソナリティは、農民出身將校以外にもたとえばアブド・アッラー・アンナデイムなどに見出されるのである。<sup>(39)</sup>

オラービーはその自傳的な記述においてつぎのようにのべる。<sup>(40)</sup>

「私の父は村のシャイフで、八・五ファッダーンの土地をもつていた。私はこれを受け継ぎ、給料―一時は月二五〇ポンドにまでなつた―のうちから貯蓄によつて、五七〇ファッダーンになるまで段々とこれをふやした。<sup>(41)</sup>裁判のとき、私の没収された土地は五七〇ファッダーンである。私は當時その土地を安く、一ファッダーンあたり二、三ポンドで買つた。それは今では大變な價いであらう。殊に、私が買つたときにはそれは荒地 *wahash* であつたが、今ではよく耕されているのであるから。……」

これはファッラーヒーンの中のいわば豪農層の經營擴大を物語るひとつの材料である。オラービーの同志、シャルキヤーの若い地主ハサン・ムーサー・アルアッカード Hasan Musa al-'Aqqad はまさにそのような成長農民の典型であつたのではないか。<sup>(42)</sup> われわれはまだたとえ何らかの間接的な資料にもせよ確證の材料をまつたくもちえないでいるが、ひとつの作業假説としてつぎのようなモデルを考えてみることができる。すなわち、このような農民經營の擴大は必ずしも一定の農民分解を前提とすることなく進行した。村の外側にある荒蕪地の耕地化<sup>(43)</sup>がその基礎であつて、この面での地主の成長は直ちにハラージュ負擔農民の間でのハラージュ・私有農民家族とハラージュ・喪失農民家族とへの分解を意味するのではなく、少くともこの段階ではこのような上昇の部分があることによつて一層ハラージュおよびオシユル負擔體系に對する農民の共通の利害が強化されていたとみるべきである。サイドの時代以來の耕地の擴大は、オラービー運動の段階までは少くとも、このような形をとつたかなりの部分があるのであつて、直接、農

民保有地の收奪過程とは重ならないのではないか。従つて農民分解という側面とこれを媒介としない耕地擴張の側面とふたつの面から豪農・地主の成長を考えるべきであり、後者の側面の比重の大きさを十分考慮する必要がある。ムカーバラ Muqābala<sup>(45)</sup>とその廢止とに對してファッラーヒーン一般の反撥があり、その基盤の上に豪農の指導がなりたつという構造がここで考えられる。オラービーやアッカードの人民的立場はその支點がここにあると見ることが出来る。オラービーは農民に高利貸からのまつたき解放を約束して煽動できる立場にあつた。農民の意識において、(主としてデルタ地帯に限られるが)收奪者はギリシヤ人高利貸、トルコ人貴族であり、これを二元管理が應援しているという形式で敵對物が扱えられたとみられる。これを逆にオラービーらの意識においてみると、イスラム的な「共同体」の統一性、安定性、秩序に對する確固たる信頼があり、正義と公正とがその保障である、そこで正義と公正を破るものはイスラム的な「共同体」の敵である、ということになるであらう。<sup>(46)</sup>オラービーの家長としての風格<sup>(47)</sup>も、その政治的活動を貫く信念も、このような意識と關係すると見られる。

ここで共和主義の問題にふれなければならないが、オラービーが、

「イスマールールの廢位はわれわれの肩から重荷をとり去つた。そしてすべての人がよろこんだ。しかし、それをわれわれ自身の手でやつていたとしたら、事態ははるかに望ましかつたであらう。われわれは、サイドを除いてはすべて支配者として不適當なムハンマド・アリー<sup>(48)</sup>の一族を皆おいはらつて、共和國を宣言することができたであらう」。

とのべ、またマフムード・サーミー・アルバールディーが

「われわれはエジプトをスイスのような共和國にかえることを考えていた。しかし運動の初期に、オラマーはこの

考えに對する用意ができていないことがわかつた。彼らは時代に餘りにも遅れていた。それにもかかわらず、われわれは試みるだろう。<sup>(49)</sup>

とのべるとき、その「共和國」は、エジプト史のこの段階においては前述のオラービーの意識を前提として理解されるべきものではあるまいか。

- 1 Traduction de l'original en langue arabe. 要約は 'Abd al-Rahmān al-Raḥī : Al-thawrah al-'urābiyah, p. 72. による。
- 2 ランダウはフリー・ルービーを考へてゐる。 Landau : op. cit. p. 90.
- 3 'Abd al-Rahmān al-Raḥī : Al-thawrah al-'urābiyah, pp. 71~72.
- 4 Landau. p. 91.
- 5 Blunt : op. cit. Appendix V, pp. 556~559.
- 6 Ibid. p. 173~175.
- 7 Broadley. p. 174.
- 8 そのまづこの責任ある表明は、一八八二年の憲法制定過程でおこなわれた。
- 9 Broadley. p. 166~172, トルコ宮廷との往復書簡。 Blunt. pp. 494~497.
- 10 Blunt. p. 483.
- 11 Blunt. p. 493.
- 12 W. B. Hesseltine & H. C. Wolf : The Blue and the Gray on the Nile, 1961, pp. 73~4.
- 13 Broadley. pp. 231~233. におけるインフドウフ辯明書中の評價が大體代表的なものと考えられてゐる。
- 14 Blunt. p. 486.
- 15 J. M. Ahmad : op. cit. pp. 21~23.

- 16 ムハンマド・アブドゥフでは、オマル・マクラムの段階よりシェーラの〔議會〕を要求し、専制主義を拒否するのは、決して單に外國をまねたいという氣持から來るのではなく、それがシャリーアの要求と合致していることを知る。」
- 17 いずれも要約であるが al-Rāfi' : 'Asr Ismā'il, vol. II, p. 183. または Cromer : op. cit. p. 79.
- 18 Landau, p. 7~13.
- 19 Aへの註(12)を見よ。
- 20 テキストは al-Rāfi', 'Asr Ismā'il, vol. II, pp. 194~200. で與えられている。
- 21 一八七九年七月、名稱は Majlis shura-i-nuwwāb なる Majlis al-nuwwāb にかわつた。
- 22 al-Rāfi' : 'Asr Ismā'il, vol. II, pp. 200~206.
- 23 Blunt. Appendix VI, pp. 561~570.
- 24 Landau. p. 38.
- 25 B. Lewis : The Emergence of Modern Turkey. p. 161.
- 26 Blunt. p. 570.
- 27 九・九事件に關して、そこでリヤード退陣、軍隊増員とならんで憲法が要求された事情を説明しようとして、アブドゥフは「オラービーの行動は大いに人氣を集め、彼と國民黨の非軍人メンバー、たとえばスルターン・パシヤ、スライマーン・アバーザ、ハサン・フッシュライーイそして私などとの接觸が深められることになつた。そして憲法の新しい要求を提出させたのは、われわれであつた。」と云々。 Blunt. p. 490.
- 28 Broadley. pp. 173~174.
- 29 Blunt. p. 482. オラービーは Colonel Louis のボナバルト伝のアラビア語訳を読んだ。
- 30 Ibrahim 'Abduh : Taṭawwur al-shīkhah al-miṣriyah. ヤアクトーブ・サンヌーアについての最近の研究としては、Irene L.

Gendzier : James Sanna and Egyptian Nationalism, Middle East Journal, Winter 1961, pp. 16~28.

- 31 Ahmad : op. cit. p. 19 イスハーンの言葉。
- 32 英英蘭特設委員の國民會議を中心とした大衆的高揚の論議。この論議が、その典型的なものである。Broadley, p. 123~142, 504~507.
- 33 Blunt. pp. 327~328.
- 34 Ibid. p. 326, 339~346
- 35 Ahmad. pp. 5~15.
- 36 W. C. Smith : Islam in Modern History, 1957. Chap. 2.
- 37 ノートンと補説。Blunt. p. 139.
- 38 al-Rāfi'i : Al-za'im Ahmad 'Urabi, 1952, pp. 39~40.
- 39 Ahmad. p. 19.
- 40 Blunt. p. 481.
- 41 一九五三年以降、ノール・プラットフォーム紙に掲載された記事によれば、ハセナファッタンと示されているところ。Gabriel Baer : A History of Landownership in Modern Egypt, 1800~1950, p. 27 & 50.
- 42 Ibid. p. 135, 343~344, 484~491, 529.
- 43 McCoan : Egypt as it is, 1877, pp. 180~199.
- 44 Cave Report. (Mc Coan : Ibid. pp. 386~423) Spc. App. No. 1, No. 2.
- 45 Rapport concernant le règlement provisoire de la situation financière. p. 14~25. Cromer op. cit. Chap. V, X.
- 46 Mudhakirāt 'Urabi のうたをうたうに見えたるタウフイーク批判は、オラービーの一點に集約される。

- 47 Broadley におけるオラービーと彼の家族との関係の描寫。たとへば Chap. IX, pp. 396~7.  
48 Blunt. p. 483.  
49 Ahmad. p. 26

(補記) 本稿執筆後、カイロにおいてオラービー運動關係の直接史料に接することができ、またカイロ大學の Dr. Mujaammad Anis やフイン・シャムス大學の Dr. Ahmad 'Abd al-Rahim Musjafa から多くの示唆を與えられた。特にアフマド・アブド・アッラヒーム・ムスタファ氏はオラービー革命やジャマル・アッディーン・アルアフガーニーに關する研究で注目すべき學者である。史料および研究の最新の動向については、本稿の中にくみ入れることができないので、いずれ別個に紹介をおこなう予定であり、またそれらを消化して新しい論文を書きたいと思つてゐる。